

西方世界とインド洋貿易 (4)

——ヘレニズム時代・ローマ帝制初期を中心に——

荻 野 博

VII ローマ帝国時代初期のインド洋貿易の展開(2)——アラビア半島およびペルシア湾沿岸——

Periplus Maris Erythraei (『エリュトウラー海案内記』, 以下 *Periplus* と略称) の作者は、「ベルニーケーから見て右手」とかれがいつているアフリカ東海岸を、紅海の奥地から赤道以南のラプタまでたどると、再び紅海にもどり、こんどは反対側の「ベルニーケーの左手」、すなわちアラビア半島側の沿岸をやはり紅海の奥地から記述し、次いでアラビア海の沿岸からペルシア湾沿岸、さらにインド沿岸へと筆を進めている。ここではそのうちアラビア半島およびペルシア湾沿岸について考察することとする。

Periplus の書かれたころは、アラビア半島には北部にナバタイ王国が、また半島の南西隅にはヒムヤル王国、その東方にはハドゥラマウト王国があり、その東方のオーマン北東部からペルシア湾沿岸にかけては、パルティア帝国の支配がおよんでいた。ここでは以上の政治的支配関係から、便宜上ナバタイ王国沿岸、ヒムヤル王国沿岸、ハドゥラマウト王国沿岸、およびオーマン北東部・ペルシア湾沿岸の4つの地域にわけて考察を進めることとする。ただし、これらの政治的勢力のおよぶ範囲は明らかでない点が多々あり、またここではインド洋貿易という視点から考察するので、必ずしも厳密に政治的領域にとらわれることはせず、多少の出入りのあることをおことわりしておく。

ナバタイ王国沿岸

ナバタイ王国の沿岸で *Periplus* の作者があ

げているのは、紅海岸の奥地にあるレウケー・コーメー Leuke Kome である。ここはミュオス・ホルモスから2～3日の航程で、湾(紅海)を横断したところにある碇泊地かつ要塞であると *Periplus* には書かれている¹⁾。レウケー・コーメーは「白い村」という意味のギリシア語で、一般に今日の El Hauara 港 (25°7' N., 37°15' E.) に比定されている²⁾。ここはすでに述べたように、アイオリス・ガルロスにひきいられたローマ帝国の南アラビア遠征軍が上陸した地点で、当時はナバタイ王国の支配下にあったと考えられ、*Periplus* には「此処からペトウラなるナバタイオイの王マリカスの許へ(道が通じて居る)」と記されている³⁾。このマリカスは *Periplus* の成立年代のきめ手の一つと考えられる人物で、ナバタイ王国の王 Malichus 2世に比定されることは、すでに述べたとおりである⁴⁾。またその都ペトラ Petra はイルサレムの南々東150キロほどの地点 (30°19' N., 35°37' E.) にあり、紅海の奥地のアカバ湾と死海とをつなぐ大きな溪谷 Wadi Musa の中に、巨大な岩石に囲まれて、今日その遺跡が残っている。そ

1) *Periplus*, 19. 村川堅太郎氏著『エリュトウラー海案内記』, 生活社, 昭和21年, 90頁; Wilfred H. Schoff, *The Periplus of the Erythraean Sea*, 1912, p. 29.) なおミュオス・ホルモスから2～3日の航程というのは、その位置から見てベルニーケーからの誤りと考えられ、これはおそらく書写の際のミスであろうと、ショッフは推定している。(Schoff, *op. cit.*, p. 101.)

2) Schoff, p. 101; 村川氏著, 152頁。なお hauara という語はアラビア語で、やはり「白い」という意味である。

3) *Periplus*, 19. 村川氏の邦訳による。同氏著, 90頁。(以下 *Periplus* の引用はすべて村川氏の前掲書の邦訳によることとする。)

4) 本稿(1) (『流通経済論集』 Vol. 6, No. 4), 42頁参照。

こは東西の両側を高さ 300 メートルほどの 2 つの平行した砂岩の山が走って、この溪谷と遺跡を閉じこめており、東側の山壁にある割れ目を通して、曲りくねった狭い道が中へ通じている⁵⁾。petra はギリシア語で「岩」という意味で、遺跡をとりまく岩石は、赤、紫、灰、褐、黒、黄と、色とりどりの層をなして立っており、狭い峡谷を通してその中へ入ると、左右の岩壁には多数の墳墓が刻まれ、また神殿やギリシア式の劇場なども刻まれていて、かつてこの都市が大いに繁栄したことを示している。この遺跡は 1929 年に Melchett Exploration Fund によってはじめて科学的な発掘が行なわれていらい、1930 年代および第二次大戦後もしばしば発掘が行なわれ、ローマ時代の道路や凱旋門のアーチなどが発掘されたほか、壺、コップ、ランプ、美しい薄手の土器、貨幣、そのほかさまさまの遺物が多量に発見されている⁶⁾。この都市はもともとエドム人 Edomites の占拠していたところであったが⁷⁾、いつかその時期は判然としなないが、ナバタイ人がかれらを征服してここを占拠し、アケメネス朝の宗主権のもとで、またヘレニズム時代になると独立して、隊商都市として繁栄した⁸⁾。

ペトラは南アラビア方面から北上し、半島の砂漠の縁返地帯を紅海に平行して地中海岸のガザまで走っている隊商路が通っているほか、ペルシア湾岸のゲラからも道が通じており、そのほかアカバ湾からボストラ Bostra, ダマスコス, パルミユラ方面にいたる通路の通過地点でもあり、さらに前述のようにレウケー・コーマーからも道が通じていた⁹⁾。したがって、ペトラは古代においては東西間の隊商貿易の一大要衝をなしており、ナバタイ人はこのような東西貿易の仲介者として、早くから活発な活動を展開していたようである。このことを徴証する資料は乏しいが、たとえばアレクサンドロス大王の没後、その部将アンティゴノスの軍隊がペトラを攻撃した時、南アラビア方面から送られてきたと考えられる乳香および没薬、それに銀 500 タラントを奪ったことが、ディオドロスによって伝えられている¹⁰⁾。またペトラではないが、当時ナバタイ王国の領内にあったと考えられる Abda (アカバの北方) および Khirbet Tannur (死海の東南東) で発見された 2 個の貨幣は、インドやイラン方面およびシリア方面とこの国との交易関係を示してくれるように思われる。前者は前 220 年ごろに鑄造されたバクトリアの王デメトリオス Demetrios の銀貨で、この王はインダス川下流、イラン東部、アフガニスタンを攻略して勢威を振った人物である。また後者は大王といわれたセレウコス朝のアンティオコ

5) Philip C. Hammond, "Petra," *The Biblical Archaeologist*, Vol. XXIII, I [1960], p. 29. なおストラボンにはペトラについて、次のように書いている。「ナバタイ人の首府はペトラである。そこはそうでなければならぬから平坦な場所であるが、周囲を岩で固められている。外側はけわしく垂直であり、また内側には泉が多量にあって、家庭用と灌漑に用いられる。」(Strabon, XVI, 4, 21.) またプリニウスは次のように書いている。「次はナバタイ人で、ペトラという町に住んでいる。そこは幅が 2 マイルに近い深い溪谷で、近よりがたい山々に囲まれており、その間に一筋の川が流れている。」(Plinius, *Naturalis Historiae*, VI, xxxii, 144.)

6) Hammond, *op. cit.*, pp. 29-32; ditto, "Excavations at Petra in 1959," *Bulletin of the American School of Oriental Research* (以下 BASOR と略称), No. 159 [1960], pp. 26-31 を参照。

7) ペトラは旧約聖書ではセラ Sela (やはり「岩」という意味) という名前では呼ばれている。『列王記』下、14 章 7 節には、ユダヤの王アマジヤ Amaziah が「塩の谷でエドムびと 1 万人を殺し」またセラを攻め取ったことが記されている。そのほか『士師記』1 章 36 節、『イザヤ書』16 章 1 節など参照。

8) M. I. Rostovtzeff, *Out of the Past of Greece and Rome*, 1965, pp. 70-72.

9) プリニウスは注 5) で引用した文章に続いて、次のように書いている。「(ペトラは) 地中海岸のガザの町からの距離が 600 マイルで、またペルシア湾からの距離は 635 マイルである。ペトラでは 2 つの道が出あう。すなわち、一つはシリアからパルミユラにいたるものであり、他はガザからくるものである。ペトラのあとではカラックス (エウフラテス川とティグリス川が合してペルシア湾に流れこむシャト・エル・アラブ川のほとりにあった町——引用者) にいたるまでオマニ人が住んでおり、そこにはかつて有名であった Abaesamis や Soractia の町があったが、いまは砂漠となっている。次いで Pasitigris (イランからシャト・エル・アラブ川に流れこむ川——引用者) の岸辺に Forat という町があり、Characeni 人の王に属している。ここはペトラの人々がよく行くところで、かれらはそこからカラックスまでは、12 マイルの間を水上を潮流を利用して旅をする。」(Plinius, *N. H.* VI, xxxii, 144-45.)

10) Diodoros, XIX, 95.

ス3世(前223~187在位)の治世、前223年から213年ごろの間にアンティオキアで鑄造されたものである¹¹⁾。またエジプトで発見されたある棺には、Sarapis 神の代理人として紅海で香料の取引に従事していたナバタイ人と考えられる商人の名前と商業取引のことが刻されており、ハイヘルハイムはこれが前264/263年のものであると推定している¹²⁾。いずれにしても、かれらはヘレニズム時代には、東西間の貿易の仲介者として相当活発な活動を展開していたようであり、ローマ帝国の成立後も、その独立をほとんど失うことなく活動を続けたようであるが、2世紀のはじめトラヤヌス帝(98~117在位)の東方政策の一環として征服された。トラヤヌス帝はこの地方をローマの属州とし、それ以後ペトラは衰退の道をたどったと一般に考えられているが、それまでの仲介貿易によって蓄積された富のお蔭で、かれらはすくなくともなお1世紀間は、その繁栄を持続することができたろうと、ロストフツェフは推測している¹³⁾。

このようにナバタイ人は首府のペトラを中心として、ヘレニズム時代からローマ帝国時代の初期にかけて、東西貿易の仲介者として活躍し、東方世界の貨物が陸揚げされるイタリアのプテオリ Puteoli 港に、ドックや倉庫まで保持していたようである¹⁴⁾。またペトラにはローマ人をはじめとして、多数の外国人が居住し、かれらは相互に、また土着の住民と、よく訴訟をおこすが、土着の住民は相互に告訴するようなことはなく、平和に暮らしていると、ストラボンが書いている¹⁵⁾。ペトラに住む外国人がこのように訴訟を行なったのは、あるいは商取引をめぐるの紛争がその原因であったかも知れず、こ

れらの外国人の多くは商業上の目的でこの地に滞在していたものと思われる。またナバタイ人が平和を好んだのも、かれらが商業の民であったからであろう。いずれにしても、ナバタイ人が南アラビアやペルシア湾方面から送られてくる東方世界の商品を中心とする中継貿易に当時従事していたことは、疑いがない。

しかし、西方世界の商人はヘレニズム時代の後期以降、しだいに紅海から海上を直接南アラビアやソマリーランド、さらにインド方面にまで進出するようになったから、これによってナバタイ人の商業活動がかなりの制約をこうむるようになったことは、想像に難くない。ストラボンとは別のところで「香料の貨物はレウケー・コーメーからペトラに送られ、そこからエジプトに近いフェニキアの Rhinokolura に送られ、さらにそこから他の人々のところへ送られる。しかし現在は、その大部分がナイル川によってアレクサンドリアに輸送される。それらはアラビアおよびインドからミュオス・ホルモスに陸揚げされ、それからラクダでナイル川の運河にあるテーベのコプトスに運ばれ、これがアレクサンドリアに運ばれてくる」と書いている¹⁶⁾。アウグストゥス帝と同時代のストラボンの以上の記述は、東方産の香料がかつてはレウケー・コーメーおよびペトラを経て西方世界に送られていたものが、ローマ帝国時代に入ると、その多くがナバタイ人の手を経ないで、海路をエジプト側のミュオス・ホルモスに送られ、そこからアレクサンドリアに輸送されるようになったという貿易路の変更——同時にそれはアラビア人から西方のギリシア人へと商人および輸送者の変更をも意味している——を述べたものと解することができる。

このようにして、南アラビア方面からレウケー・コーメーやペトラを経由する貿易は、ストラボンの時代には、すでに衰退しはじめていたものと思われる。しかし、レウケー・コーメーは碇泊地であり、海上から南アラビア方面の物産を受け取っていたことは否定できない。Pe-

11) Nelson Glueck, *Deities and Dolphins: the Story of the Nabataeans*, 1965, p. 12.

12) Fritz M. Heichelheim, *Wirtschaftsgeschichte des Altertums vom Paläolithikum bis zur Völkerwanderung der Germanen, Slaven und Araber*, I, S. 527-28—Glueck, *op. cit.*, p. 43 による。

13) M. Rostovtzeff, *op. cit.*, pp. 72-73.

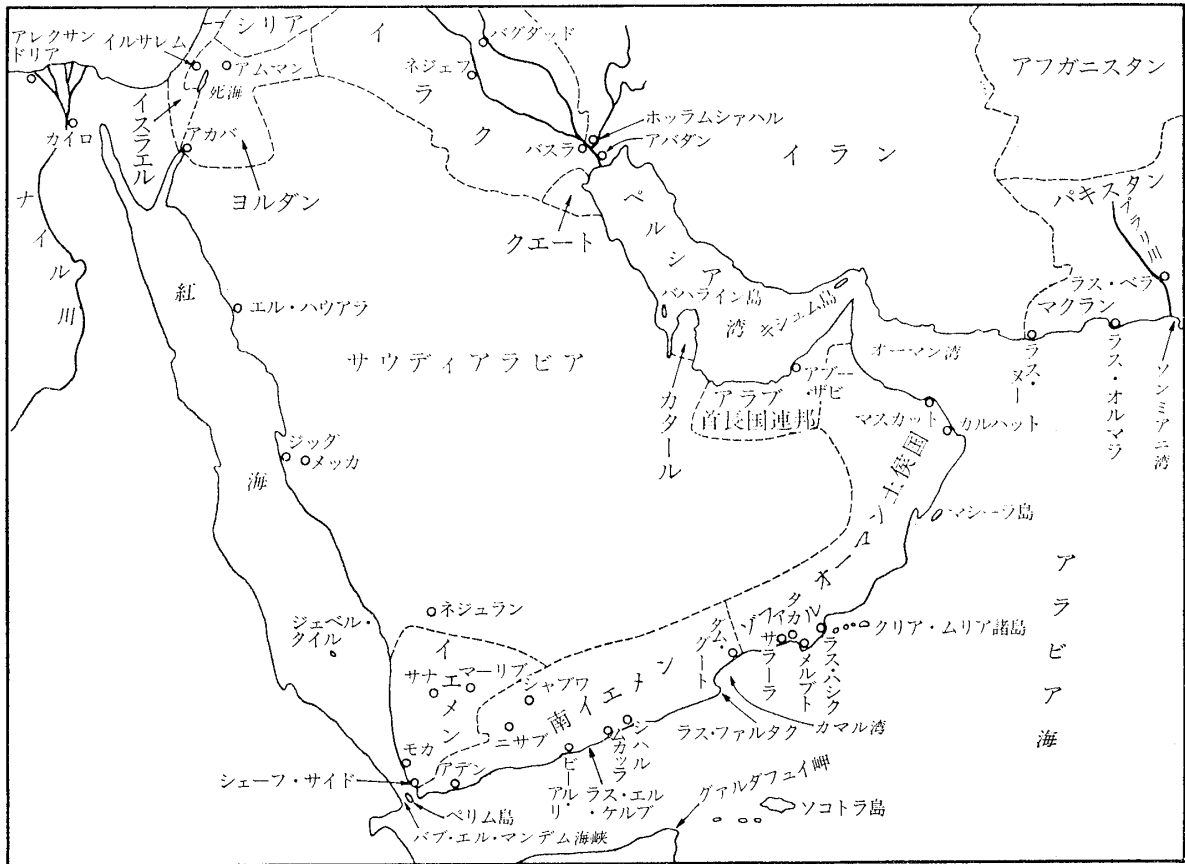
14) Tenney Frank, *Rome and Italy of the Empire* (*An Economic Survey of Ancient Rome*, ed by T. Frank, Vol. V), 1940 [reprint 1959], p. 274.

15) Strabon, XVI, 4, 21.

16) *Ibid.*, XVI, 4, 24.

第1図 現在のアラビア半島・ペルシア湾沿岸

(---は国境線)



riplus に「此処 (レウケー・コーマー) もまたアラビアから此処に送られるさして大きくない船にとって一寸取引地のやうな位置にある」と記されていることは¹⁷⁾、このことを物語ってくれるものといつてよからう。しかし、アラビア人の紅海方面の海上活動は、それほど活発であったとは考えられない。後述するように、紅海のアラビア側は碇泊に適した港湾がすくなく、また沿岸の住民の海賊行為もはなはだしく、航海が危険であったからである。おそらく南アラビア方面とレウケー・コーマー間の海上交通は、西方世界の商人が紅海に進出する以前から、それほどいちじるしいものではなかったといつてよく、主として陸路による隊商輸送がその大部分を占めていたものと思われる。

しかしそれにしても、南アラビア方面からレウケー・コーマーへ船が送られていたことは、上述の *Periplus* の記事から見て明らかであり、*Periplus* にはこの記事に続いてさらに、そのた

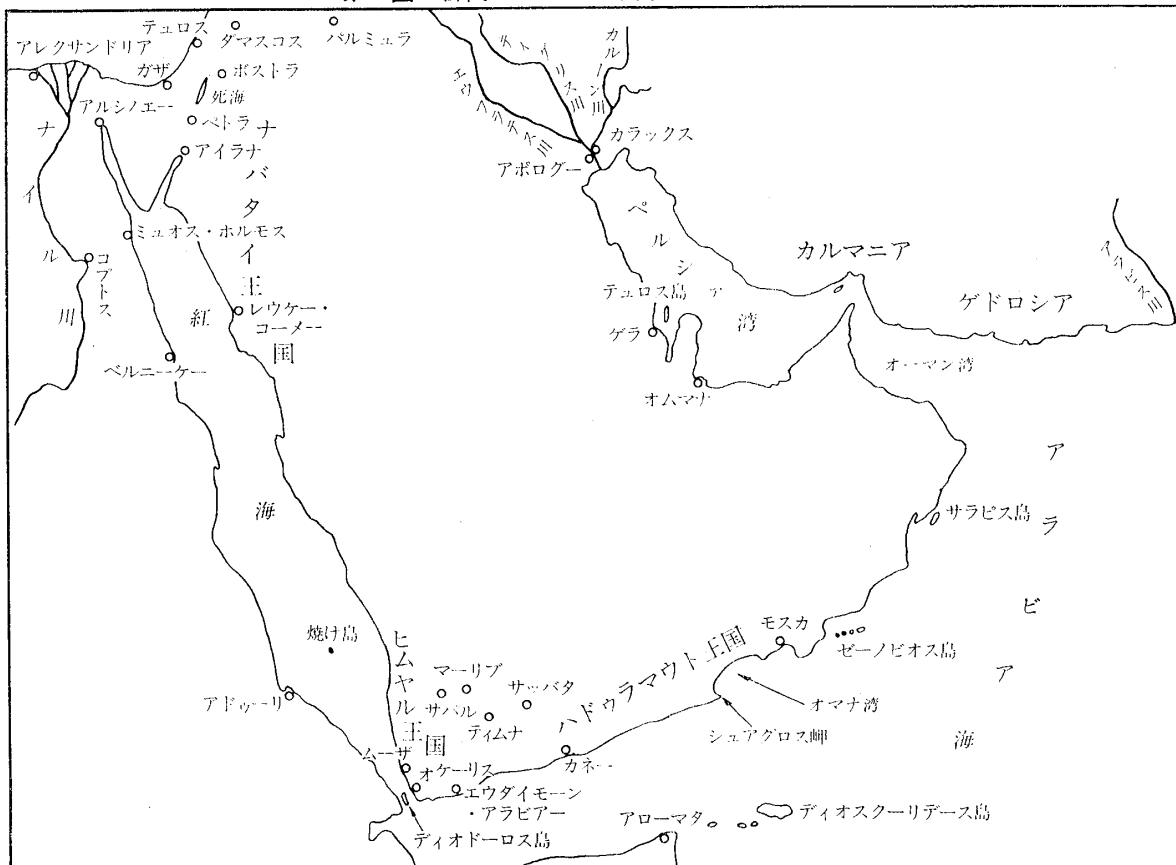
17) *Periplus*, 19. 村川氏著, 90頁.

めレウケー・コーマーへは「輸入される船荷の四分の一税の徴収官と警戒の為に、軍隊を率いた百人隊長とが派遣される」と記されている¹⁸⁾。この四分の一税の徴収官と百人隊長が、ナバタイ王国から派遣されたものか、それともローマ帝国から派遣されたものかということについては、学者の間に意見がわかれている。たとえば、ショッフはこれをナバタイの役人であるとして、当時ナバタイ王国は独立国で、しかも強力で繁栄しており、25%の税は「アラビアとローマ間の豊かな貿易」に対して、この国が徴収したものだといっている¹⁹⁾。これに反して、ウォーミンソンはこの課税はローマのもので、25%という高率の税をレウケー・コーマーで課することによって、船が税の安いエジプトの港へおもむ

18) *Periplus*, 19. 村川氏著, 90-91頁. なおショッフはこの部分を “and so a centurion is stationed there as a collector of one-fourth of the merchandise imported, with an armed force, as a garrison” と訳して、百人隊長が徴税と警備の両方の任に当たったように解している。(Schoff, p. 29.)

19) Schoff, p. 104.

第2図 古代のアラビア半島・ペルシア湾沿岸



くようにするための一種の保護関税であり、したがってそれはまた財政収入を目的としたものではない、そしてその結果、*Periplus*に記されているように、ごく小さなアラビア船だけがレウケー・コーマーを訪れるようになったのだと推定している²⁰⁾。村川堅太郎氏もこの課税とここへ派遣される百人隊長は、ローマのものであると推定されているが、この課税が紅海方面の商品をエジプトの港へ誘導するためのローマの政策に基づくものとする考えは、ありうべきことではあるけれども、これを確証する資料に乏しく、むしろローマ帝国の領土外で、しかも、「ローマ人」が派遣されて徴税に当たっているという例外的な事情が、作者にこのような特別の記述をさせた——*Periplus*にはレウケー・コーマー以外の港での課税については、一言も述べられていない——と考えられるといっている²¹⁾。

このように、レウケー・コーマーで徴収される四分の一の税の徴収官と百人隊長の国籍については、学者の間で意見が分かれているが、当時ナバタイ王国は独立国ではあったものの、ローマの勢力が相当におよんでいたことは、たとえばローマの南アラビア遠征軍にナバタイ王国の軍隊1,000人が参加し、この国の高官であるシュルライオスとその先導の任に当たったこと、またシュルライオスがこの遠征の失敗の責任を問

誘導するためのローマの政策によるものとしており、またコルネマンはネロ帝の東方政策に由来するものと考えている。(M. Rostovtzeff, *Archiv für Papyrusforschung*, IV, 1908, S. 307; E. Kornemann, "Die historischen Nachrichten des Periplus Maris Erythraei über Arabien," *Janus* I, 1921, S. 59.—いずれも村川氏著, 66-67頁および71頁注12による。) チャールズワースもこれをローマのものと考え、ロストフツェフの所説に賛意を表し、かつこれを傍証してくれるものとして、25%の徴税を監視する tetratones あるいは manc. IIII merc. の存在を伝える碑文がパルミユラで発見されたことを指摘している。(M. P. Charlesworth, "Roman Trade with India: a Resurvey," [*Studies in Roman Economic and Social History in Honor of Allan Chester Johnson*, ed. by P. R. Coleman-Norton, 1951], p. 139.)

20) E. H. Warmington, *The Commerce between the Roman Empire and India*, 1928, pp. 16 & 309.
 21) 村川氏著, 65-67頁。なおロストフツェフもウォーミントンと同様に、この課税をエジプト側に東方の貨物を

われて、ローマに呼び出され、処刑されたことなどから考えて²²⁾、否定することはできない。現にストラボン、ナバタイ人がシリア人とともにローマに服属しているとさえいつている²³⁾。このような点から考えれば、東西間の貿易仲介者として繁栄してきたナバタイ王国に対して、ローマが相当に勢力をおよぼし、とくに南アラビア方面からの船舶が訪れるレウケー・コーメーに、ローマが25%という高率の従価税の徴収官や百人隊長を駐在させたということは、十分ありうることであり、*Periplus*の上述の記事はそのように解釈するのがふさわしいように思われる。したがってまた、これがウォーミントンの主張するように、ローマ帝国の通商政策の所産であったかどうかは別として、レウケー・コーメーと南アラビア方面との間には、アラビア人による若干の海上貿易が行なわれていたことは否定できない。ただし、*Periplus*にはこの碇泊地でどのような商品が取引されていたかは記されていない。しかし、ストラボンの記事からすれば、香料を主とする南アラビアや東方の物産であったと考えることができよう。

レウケー・コーメーの南方には、長い距離にわたってアラビアの沿岸が続いており、そこには魚を食べているイクテュオパゴイ *Ichthyopagoi* が住み、また奥地には村々と牧地に分かれて、カルナイータイ *Karnaitai*²⁴⁾と呼ばれる「悪い人たち」が住んでおり、船が航路を誤って岸辺に近づくと、かれらの掠奪を受け、また難破すると捕って奴隷にされてしまう、そればかりでなく、この地方の沿岸地帯は港湾がなく

て碇泊が困難であり、岩のために近よりにくいところである、そのため船は「焼け島」²⁵⁾までは湾の中央を船脚を早めて航行すると *Periplus* には記されている²⁶⁾。

これはレウケー・コーメーからアラビア半島南西隅のヒムヤル王国領にいたるまでの、中間の沿岸地帯を述べた部分であるが、この沿岸の航行の困難さについては、ストラボンもアルテミドロスを引いて、「次は石だらけの浜で、その後の1,000スタディオンほどにわたる海岸は岩だらけで、港や停泊地がないために、船の通行が困難である。というのは、岩だらけの高い山が、海岸に沿って延びているから。次いで山麓の小丘に出るが、それらは岩が多くて、海に向かって延びている。そしてそれらはとくに季節風や雨の時には、船乗にとってどんな助けもおよばないほどに危険である」と書いている²⁷⁾。この沿岸はこのように航海にとって自然条件の悪いところであったが、そのうえ未開の種族が住んでいて、略奪や海賊行為をほしいままにしていたわけであって、船乗や商人にとってまことに危険な地帯であったのであろう。周知のように、アラビア半島の砂漠に住むベドゥイン人は、その乏しい生活から略奪を重要な生計手段の一つとしているが、この地方の住民は古代においてもこれと似たような生活をしていたことがうかがわれる。プリニウスもアラビアの諸種族の半分は交易に従事し、半分は略奪で生計をたてていると書いているほどである²⁸⁾。

ヒムヤル王国沿岸

沿岸の状況 焼け島を過ぎると、沿岸は開化した人々や牧場の畜群やラクダなどの地方となり、やがて紅海の入口近くに達する²⁹⁾。この紅海の入口附近のアラビア側は、*Periplus*の書かれた

22) Strabon, XVI, 4, 22-24. なお本稿(2), 70頁以下参照。

23) Strabon, XVI, 4, 21.

24) カルナイータイは写本では *Kanraeitai* となっているが、グラザー Glaser はここでは *n* と *r* が逆になっていると推定して、これを *Karnaitai* と読み、ストラボンの *Karna* または *Karnana* (Strabon, XVI, 4, 2.), プリニウスの *Carnon* (Plinius, *N.H.*, VI, xxxii, 154.), プトレマイオスの *Karna* (Ptolemaios, VI, 7, 31.) に相当するものとしており、ショッフや村川氏はこれに従っている。これはミナ(マイーン)に属する町で、その位置は明らかではないが、今日のイエメンの *Serat* 山脈中部かその北方の *Asir* 地方であろうとされている。(Schoff, p. 105; 村川氏著, 155頁.)

25) 焼け島は紅海の中央部に近い火山島の *Jeber Tair* (15°35'N., 41°50'E.) に比定されている。(Schoff, p. 106; 村川氏著, 155頁.)

26) *Periplus*, 20. 村川氏著, 91-92頁; Schoff, pp. 29-30.

27) Strabon, XVI, 4, 18.

28) Plinius, *N.H.* VI, xxxii, 162.

29) *Periplus*, 20. 村川氏著, 91-92頁; Schoff, pp. 29-30.

ころは、サバおよびズー・ライダーン Saba' wa Dhu-Raidān という二重の称号を帯びた王の支配するヒムヤル王国に属していたと考えられる。当時ヒムヤル王国はアラビア半島南西隅の沿岸一帯を領有し、Zafar を首府としていた。Periplus に「ホメーリタイ Homēritai とその隣の所謂サバイオイ Sabaioi の両種族の合法の王」として、首府サパル Saphar にいるカリバエール Charibaēl が、絶えずローマに「使節や貢物を送って歴代皇帝と親密である」ことが記されているが³⁰⁾、このホメーリタイとサバイオイの両種族の王は、サバおよびズー・ライダーンの二重の称号を帯びた王に相当するものと考えられ、カリバエール王はこのヒムヤル王国の王 Karib-il Watar Yuhan'im に比定されている。またその首府ザファル(Periplus のサパル)は、モカの北東方160キロほどのところにあり、今日の Yarim の町の附近の円形の山の頂上にある遺跡が、ザファルのものであろうと考えられている³¹⁾。

ヒムヤル王国の沿岸地帯では Periplus には上述のカリバエール王についての記述のほか、取引地としてムーザ Mūza があげられ、そのほか、湾(紅海)の入口の海峡にあるディオドロス Diodoros の島、海峡に望む村オケーリス Okēlis、および紅海の外側の海に臨んだ村エウダイモン・アラビアー Eudaimon Arabia があげられている。またムーザから3日行程ほど上手にマパリーティス Mapharitis という地方名があげられ、その中心にサウエー Sauē の市があり、そこには藩王コライボス Cholaibos が住んでいることが記されている³²⁾。このマパリーティスの藩王については、アザニアー沿岸について述べたところで、かれがこの地方を領有していることと関連して触れたので、ここでは省略することとする³³⁾。

30) Periplus, 23. 村川氏著, 93頁。なおカリバエールのローマ遣使については本稿(2)『流通経済論集』Vol. 7, No. 1, 77-79頁参照。

31) Schoff, p. 107; 村川氏著, 157頁。なお本稿(1) 42頁参照。

32) Periplus, 21, 22, 25, & 26.

33) 本稿(3), 『流通経済論集』Vol. 7, No. 3, 77頁参照。

そこでまずムーザについて考察してみよう。ムーザについては、すでに本稿でしばしば触れる機会があったが、プリニウスはインド航路の発達に関する記述の中で、オケーリスおよび後述のカネーに次いで、この港に言及し、「そこにはムーザという第3の港があるが、インドへ航行するものはここへは寄港せず、乳香やアラビアの香料を取引する商人が利用するだけである」と述べている³⁴⁾。しかし、Periplus にはムーザが「法律で定まった取引地」ἐμπόριον νόμιμον で、「向ふ側」すなわちソマリーランド沿岸やアザニアー沿岸、さらに西北インド沿岸の取引地バリュガザ Barygaza に船を送って盛んに貿易を営み、「(港)全体がアラビア人の船主や水夫と云ったやうな人達で溢れて居り商業関係の事で活気を呈して居る」と記されているから³⁵⁾、当時はムーザがヒムヤル王国の繁栄した港であり、重要な取引地であったとよかろう。ここは今日のイエメンの港で、コーヒーで有名なモカ Mocha (13°19' N., 43°20' E.) に比定されている。西方世界の商人がここを訪れて取引をしていたことは、後述するこの取引地の輸出入品から察知され、またこの港へ航海するのはトートゥ thōth の月が適当であると、Periplus に記されていることから知る事ができる³⁶⁾。

ムーザから沿岸ぞいに約300スタディオン航行すると、「アラビアの岸と対岸のアウアリテースのところのバルバリケー地方とが接近して」、約600スタディオンの海峡を形成し、その中央にディオドロスの島があり、この島のところの通航は「両側の山々から風が吹き下ろして、潮流が激しい」と、Periplus に記されている³⁷⁾。この海峡は明らかにアラビア海から紅海に入る入口をなすバブ・エル・マンデブ海峡で、ここに述べられている風や潮流の状態は、今日の状態と一致している。またその中央にあると

34) Plinius, N.H., VI, xxvi, 104.

35) Periplus, 21. 村川氏著, 92頁。

36) Periplus, 24. なお thoth はエジプトの月の名称で、8月29日から9月27日までをいう。(村川氏著, 161頁。)

37) Periplus, 25. 村川氏著, 94-95頁。

書かれているディオドーロスの島はペリム Perim 島 (12°35' N., 43°12' E.) を指している と解することができる³⁸⁾。Periplus にはさらにこれに続いて、この海峡に海に臨んだアラビア人の村オケーリスがあげられており、ここは「取引地と云ふよりは寧ろ碇泊地と給水地であり、湾の中へと渡航する人々の為の最初の船着き場である」と記されている³⁹⁾。オケーリスについては、プリニウスも乳香産地の港の一つとしてあげており、かつこの港がインドへ渡航するものにとって、もっとも有利な出発地であると述べているから⁴⁰⁾、インドへ渡航する西方世界の商人は、往來の途中オケーリスへ寄港して、水を補給したものと思われる。オケーリスはグラザーによって今日の Sheikh Sa'id (12°48' N., 43°28' E.) に比定されているが、ここは火山の噴出によって形成された陸地が海中に突き出ているところで、狭い海峡をはさんでペリム島に対して⁴¹⁾。

オケーリスを過ぎると、海が再び東に向かって開き、しだいに大海に変わってゆくが、約 1,200 スタディオンのところにエウダイモン・アラビアー（「幸福のアラビア」という意味）が現われる。ここは「海に臨んだ村」で、やはりカリバエールの王国に属し、適当な碇泊地とオケーリスのより甘くて良質の給水地があると、Periplus には記されている⁴²⁾。ここはバブ・エル・マンデブ海峡の東方 170 キロのところにある今日のアデン (12°48' N., 45°0' E.) に比定されているが、アデンは古代および中世において東西間の貿易の仲介港として繁栄したことが知られている。中世の事情については、たとえばマルコ・ポーロの『東方見聞録』に「このアデンはインドの船が貨物を積んでたくさんやってくる港である。そして商人たちは、この港から小さな船でさらに 7 日間品物を運び、7 日目の終りに陸揚げして、ラクダに積み、30 日間陸上を

旅して運んでゆく。こうしてアレクサンドリアの川へ運ぶと、この川をアレクサンドリアの町まで下ってゆく。このようにして、アレクサンドリアのサラセン人たちは、アデンを通して胡椒、その他の香料のすべてを受けとるのである」と記されている⁴³⁾。この記述から、当時は Periplus の書かれたころのように、直接紅海の奥地まで航行せず、途中で上陸して、その後は陸路をとったことがうかがわれるが⁴⁴⁾、アデンが東西貿易の仲介地であったことは、古代においても、すくなくとも西方世界の商人がインドへ直接航行する以前においては、同様であったようである。このことは Periplus に、「未だ印度からエジプトに来る者もなく、またエジプトから外洋の諸地方に敢へて渡航する者もなく〔各々〕此処迄來るに過ぎなかつた頃に、丁度アレクサンドウレイアーが外部からの輸入品やエジプトの輸出品を受け入れるやうに、両方面からの商品を受け取って居た」と記されていることから⁴⁵⁾、うかがうことができる。もっともローマ帝国時代に入ると、アデンはローマの遠征を受けて、その繁栄を失ってしまったと考えられることは、すでに第 5 章で述べたとおりである⁴⁶⁾。

43) *The Book of Ser Marco Polo*, tr. and ed. with Notes by Sir Henry Yule, revised by Henri Cordier, Vol. II, 1926, p. 438. ポーロはさらに続けて、アデンのスルタンはこれによって多額の税収があり、またアラビア人の船もたくさんアデンからインドに送られるので、輸出からも多額の収入をえているといっている。(Ibid.) またイブン・バットゥータもアデンがインド人の港で、Kinbáyat (カムベイ), Kawlam (クイロン), Cálícút (カリカット), そのほかマラパールの多くの港から大型の船がやってくること、そこにはインドの商人やエジプトの商人が住んでいること、アデンの住民は商人と担夫と漁夫からなっていること、商人の中には大富豪もあり、大船とその中の設備一式をただ一人で所有しているものもあることなどを記している。(Ibn Battuta: *Travels in Asia and Africa, 1325-1354*, tr. by H. A. R. Gibb, 1929, pp. 109-110; 前嶋信次氏訳『イブン・バットゥータ 三大陸周遊記』[角川文庫], 108頁.)

44) もっとも必ずしもそうでなかったことは、ベルニケーの南方のアイザーブ港の遺跡で、三上次男氏が唐宋から明初にかけての中国産の陶磁器の破片を多数発見し、ここが中国の陶磁器の陸揚げ場であったことを立証されたことから、知られる。(三上次男氏著『陶磁の道』[岩波新書], 32-34頁. なお本稿(1), 34頁, 注61)を参照.)

45) *Periplus*, 26. 村川氏著, 95頁.

46) 本稿(2), 73-77頁参照.

38) Schoff, p. 114; 村川氏著, 161頁.

39) *Periplus*, 25. 村川氏著, 95頁.

40) Plinius, *N. H.*, VI, xxvi, 104.

41) Schoff, pp. 114-15.

42) *Periplus*, 26. 村川氏著, 95頁; Schoff, pp. 31-32.

すなわち、*Periplus* の書かれたころは、アデンは西方世界やインドの商人の来訪するものもない、淋しい村に転落してしまっていたようであり、ムーザが活況を呈していたのである。しかし、その後アデンは再び復興したらしく、4世紀にはコンスタンティウス帝(337~61在位)がここへキリスト教会を建設する交渉を行なっている⁴⁷⁾。

輸出品 次にヒムヤル王国の海上貿易品について考察してみよう。*Periplus* には方々の港や取引地の輸出品について詳細な記載が見られるが、給水地としてのオケーリスや村落に転落してしまったエウダイモン・アラビアについては、これらについてなんの記載もなく、ヒムヤル王国で輸出品が記されているのは、ムーザだけである。

そこでまずムーザの輸出品を見ると、次のものがあげられている。

この地方の特産物としての優秀な、また滴状の没薬、すなわちアベイライア *Abeiraia* とミナイア *Minaia*、白大理石、「向ふ側」のアウアリテースからの前に述べた船荷すべて⁴⁸⁾。

以上のうち、まず白大理石については、ディオドロスが「人々の讃えるパロス島の白大理石もそのほかのどの石も、アラビアの貴石に比すべくもない。その白さはすこぶる輝やかしく、重量はもっとも重く、なめらかさは他の石のおよぶところではない」と述べており、またプリニウスはこれが香膏をいれる容器をつくるのに好適であり、以前は通常アラビアだけから輸入されていたと書いているから⁴⁹⁾、アラビア産の白大理石が早くから西方世界で珍重されていたことがうかがわれる。南アラビア地方でも古代において白大理石が建造物の一部に使用されたり、容器などをつくるのに用いられたことが、この地方の発掘から知られる。たとえば American Foundation for the Study of Man によって発掘されたサバ王国の首府マーリブの長

円形の神殿 *Haram Bilqis* (*Mahram Bilqis*) の南側の入口付近で発見された柱廊の床には、白大理石が用いられており、またカタバーン王国の領内にあったと考えられる *Hajar Bin Humeid* の遺跡からは、白大理石製の容器や彫像が多数発見されている⁵⁰⁾。その産地は明らかではないが、おそらく半島南西部の山中から切り出されたのであろう。

次にアウアリテースからの船荷については、写本には「アウアリテース」ではなく「アドゥーリ」と書かれている。アドゥーリは当時紅海のアフリカ沿岸の代表的な取引地であり、ファブリキウスはこれに従っている。しかし、アドゥーリはムーザと向きあってはおらず、またこの商人がムーザを訪れたとは *Periplus* に記されていないのに反して、アウアリテースからはムーザやオケーリスに土人が行くことが記され、またその輸出品があげられているので、ショップは「アドゥーリ」を「アウアリテース」に改めている⁵¹⁾。筆者は第6章でアドゥーリの貿易品について述べたとき、この輸入品のうち、小斧、手斧、および短剣は、あるいはムーザから送られたものではないかと推定したが⁵²⁾、アドゥーリからムーザへ輸出された品物があったかどうかは、*Periplus* の記事からは明らかではない。これに反して、ムーザとアウアリテースとの取引関係は、*Periplus* 第7節の記事から見て明らかであり、香料、少量の象牙、亀甲、ごく少量の、しかし他種のものより優れた没薬が、アウアリテースからムーザやオケーリスへ輸出されると記されているので、上述の「前に述べた船荷のすべて」はこれに相当するものと考えられ、したがってアドゥーリはアウアリテースの誤写とするのが適当であろう。すなわち、

50) Frank P. Albright, "Excavations at Mārib in Yemen," *Archaeological Discoveries in South Arabia* (以下 *ADSA* と略称), ed. by Richard LeBaron Bowen and F. P. Albright, 1958, p. 226; Gus W. Van Beek, *Hajar Bin Humeid: Investigations at a Pre-Islamic Site in South Arabia*, 1969, pp. 273-77.

51) Schoff, p. 114. 村川氏もアウアリテースと改めている。(村川氏著, 161頁.)

52) 本稿(3), 52頁.

47) Schoff, p. 115.

48) *Periplus*, 24. 村川氏著, 94頁.

49) Diodoros, II, 52; Plinius, *N. H.*, XXXVI, xiii, 62.

ムーザの商人は、対岸のアウアリテースからアフリカ産の香料、象牙、亀甲、良質の没薬を輸入して、これらを再輸出していたことがうかがわれる。

ところで、ムーザの輸出品のうちで、とくに注目されるのは没薬である。没薬は上述のように、この地方の特産物とされているばかりでなく、またアウアリテースからもごく少量ではあるが良質のものを輸入して、再輸出しているのである。このうちこの地方の特産物とされている没薬について、村川堅太郎氏は「優秀な、また滴状の没薬、即ちアベイライアとミナイア」と訳されているが、ショッフはこの「アベイライアとミナイア」を“Gebbanite-Minaean”と訳している。このような相違が生じたのは、写本ではこの部分が $(\gamma)\alpha\beta\epsilon\rho\mu\nu\alpha\iota\alpha$ という一語になっていて、判読が困難だからである。ミュラーやファブリキウスはこの語を2つにわけて、“abeiraia (kai) minaia”と読み、村川氏はこれを採用している。アベイライアは Sprenger のアラビアの地図で、ハドゥラマウトの東辺に置かれている地名であり、またミナイアは南アラビアの古代国家の一つであるミナ（マイーン）を指している。ショッフもこの語をやはり2つにわけたが、ハドゥラマウトの東辺にあるアベイライアは没薬産地ではない——後述するように、ハドゥラマウトは乳香産地である——としてこれを斥け、これを“Gebbanite-Minaean”としたのである⁵³⁾。Gebbanite はカタバーン王国を指しており、しかもカタバーン王国は後述するように没薬産地と考えられるので、ここはむしろショッフの見解の方が適当であろう。この名称で呼ばれる滴状の没薬は、スタクテースタクトと呼ばれるもので、普通の没薬が没薬樹に人為的につけた切りこみから流出する樹脂であるのに対して、スタクテースタクトは切りこみをつける前に自然に木から流れ出したもので、もっとも貴重なものとされている⁵⁴⁾。

没薬については、すでに前章でこれがアラビ

アおよびソマリーランドに産することを述べたが、*Periplus* の作者がアラビア半島で没薬の輸出港としてあげているのは、ムーザだけであるから、アラビアではこの商業地の後背地である半島の南西部が、没薬産地であったと考えることができよう。プリニウスは産地を現わしていると思われる名称で、没薬の種類を分類している。それによれば、第1は Trogodytæ の野生種、第2は Minaea で、これにはゲッパニタイ王国の Astramitæ, Gebbanitæ, および Ausaritæ が含まれる、第3は Dianitæ, 第4はさまざまな産地のもの、第5は Sabæi の王国内で沿海地方の Sambracene, 第6は Dusirite と呼ばれるものであること、このほかにただ1カ所だけで見られる白い種類があり、これは Mesalum の町に運ばれて販売されること、トロゴデュタイのものは厚みのあることで識別され、また他の種類のものより匂いが強いこと、Samb-racene がその快適な品質の故にもっとも推奨されるが、匂いは強くないこと、などを記している⁵⁵⁾。以上のうち、Trogodytæ はソマリーランド産であると考えられ、また Dianitæ および Dusirite はどこか判然としませんが、Astramitæ はハドゥラマウト、Gebbanitæ はカタバーン、Ausaritæ はアウサーン、Samb-racene は Tihāma 南部の沿岸地帯に相当すると考えられ、また Mesalum はアデンの東方の Abyan 地方の El-Aṣṣallāh に比定されており、Astramitæ を除けば、いずれもムーザやアデン附近の沿岸およびその内地の、半島南西部に位置している⁵⁶⁾。Astramitæ もゲッパニタイ王国のものの中に数えられているから、おそらくカタバーン王国に隣接する、ハドゥラマウトの西部の地域をこの場合は指していると解してもよかるう。またプトレマイオスのアジアの第6地図には、2つの乳香産地 (Smyrnophoros Interior および Smyrnophoros Exterior) の位置が示されているが、後者はエウダイモン・アラ

55) *Ibid.*, XII, xxxv, 69.

56) Gus W. Van Beek, “Frankincense and Myrrh,” *The Biblical Archaeologist*, XXIII, 3 [1960], pp. 74-75; Brian Doe, *Southern Arabia*, 1971, p. 49.

53) 村川氏著, 160頁; Schoff, p. 114.

54) Plinius, *N. H.*, XII, xxxv, 68.

ビアールの北方、前者はそれより北西方の内地におかれている。

近代になってからのこの地方の没薬樹の情報についてみると、Vander Meulen はアデンの北東155キロの Nisab の附近に生えている没薬樹の写真を撮影している⁵⁷⁾。またボウエンはかつてカタバーン王国の中心地であった Beihān 地方の、標高900ないし1,200メートルの岩だらけの山中で、没薬樹に相違ないと思われる、樹脂の色が赤みがかった1本の木を発見したことを報告している。また H. Ingrams 女史はハドゥラマウトの Hajar 地方に今日なお没薬樹が見られ、そのうちの1カ所は Wadi Madraha 近くの標高790メートルのところであること、および Wadi Bana の山中にもこれらの木が多数あることを伝聞したことを報じている。そしてボウエンはこれらのことから、没薬樹がアラビア半島では標高600~1,500メートルのところに野生しているようだといっている⁵⁸⁾。さらにボウエンはベイハーン地方で古代の灌漑遺跡の調査中に、シルト(沈泥)の堆積している古代の畑の地表に、奇妙に変色した円形の跡を多数発見した。それらはおおむねいずれの方向にも3メートルくらい離れて列をなして並んでおり、またこれらの円形の跡のなかには、中心部の直径30~50センチの丸い部分が真黒になっているものもあった。そしてかれはこれらがかつて樹木の栽培された跡を示すものと考え、その間隔からこの地方で古代から栽培されていたと思われるナツメヤシやエルブではなく、没薬樹の栽培の遺跡であろうと推定している⁵⁹⁾。

プリニウスの上述の記述やイングラムズ女史の報告は、ハドゥラマウト地方にも没薬樹が生育することを示しており、またモイレンが没薬樹を撮影したニサブは、ハドゥラマウトに近い

ところである。したがって、没薬は古代のハドゥラマウト王国でも産したと考えなければならぬかも知れないが、ハドゥラマウト王国の取引地であるカネーの輸出品として *Periplus* に記されているものの中には、没薬は見られない。このようなことから考えると、アラビアの古代の没薬は、おおむねかつてのアウサーン、カタバーン、ヒムヤル諸王国の領域である半島南西部の地域で生産されたといってさしつかえないように思われる⁶⁰⁾。ストラボンは Kattabania, すなわちカタバーンで乳香を産し、Chatramotitis, すなわちハドゥラマウトで没薬を産すると書いているが⁶¹⁾、これはおそらく逆であるといつてよからう。

プリニウスは没薬樹には乳香樹と同様に、年2回切りこみをつけること、栽培種の没薬がスタクテーに次いで良質であること、野生種にも良質のものがあつた、これは夏1回切りこみをつけること、などを書いているから、没薬の生産を高めるために、没薬樹の栽培が行なわれていたことが知られ、これらは年2回採取されたことがうかがわれる。またかれはこれに続いて、没薬は神に対しては十分の一税を納めないが、栽培者はゲッパニタイの王に収穫高の四分の一を納めなければならないこと、残りの没薬は庶民の間から購入されて、皮の袋につめられることなどを書いている⁶²⁾。このことは商人が庶民である生産者の間から没薬を買い集め、これを隊商輸送に便利なように、皮の袋につめて出荷することを示している。いずれにしても、こうして集められた没薬が、はじめは隊商によって陸路を地中海地方やペルシア湾沿岸のゲラなどへ輸送されたのであろう⁶³⁾。またアデンから海

60) ヴァン・ビークは没薬産地の限界は確実ではなく、Wadi Hadhramaut 地方やずっと東方の Dhofar の Qara 山中の没薬樹を報告しているものもあるが(かれはその例としてイングラムズ女史の報告をあげている)、これらの記事は確認されていないといっている。(Van Beek, *op. cit.*, p. 73.)

61) Strabon, XVI, 4, 4.

62) Plinius, *N. H.*, XII, xxxv, 68.

63) ストラボンはかれが没薬の産地としている Chatramotitis へ、香料商人たちが Aelana(紅海奥地のアカバ)からは70日、ペルシア湾岸のゲラからは40日で到達する

57) D. Van der Meulen, *Aden to the Hadhramaut*, 1947, p. 22—Van Beek, *op. cit.*, pp. 73-74 による。

58) Richard LeBaron Bowen, "Irrigation in Ancient Qatabān (Beihān)," *ADSA*, p. 62; H. Ingrams, "Excursion into Hajar Province of Hadhramaut," *Geographical Journal*, 98 [1941], pp. 126 & 132—Bowen, *op. cit.*, p. 62 による。

59) Bowen, *op. cit.*, pp. 60-61.

路輸出されたものもあったかも知れない。そして *Periplus* の書かれたころは、産地からムーザへ輸送され、そこから海路輸出されていたことが知られるのである。

以上にあげたムーザの輸出品は、いずれも西方世界で大いに需要されたものであるから、それらはここを訪れた西方の商人の持ち帰ったものが多かったであろう。またムーザの商人は、すでに述べたように、アザニア地方と取引関係があり、そこから多量の象牙、犀角、亀甲などを輸入しているから、*Periplus* にはこれらが再輸出されるとは書かれていないが、その多くはやはり再輸出されたのではなかろうか。ムーザの商人はまた西北インドのバリユガザにも船を送って取引をしているが、かれらがここへどのようなものを持っていったかは、明らかではない。すくなくとも *Periplus* に記されたバリユガザの輸出品の中には、この地方の特産物である没薬は見当らない。ただし、バリユガザの輸出品の中には、アラビアのブドウ酒があげられている⁶⁴⁾。ブドウ酒は後述するように、ム

と書いている。(Strabon, XVI, 4, 4.) またボウエンはアデンから北東に向かい Lōdar および El-Beidha を経てベイハーン地方にいたり、Mablaqah 峠——この峠道には大きな板石が敷かれ、急なところには階段が刻まれており、また頂上には幅15~20フィート、深さ40フィート、長さ100フィートにわたって岩石を切り開き、まっすぐの道を通しており、古代において隊商路として開かれたものと考えられる (Wendell Phillips, *Qataban and Sheba: Exploring Ancient Kingdoms on the Biblical Spice Routes of Arabia*, 1955, pp. 156-157)——を経て、サバの首都マリブにいたる今日の隊商路は、古代から使用されていたものと想定し、カタバーン王国の中心地であるベイハーン地方の入口に近い El-Beidha 附近の Im'adiya の小遺跡(4つの建物の廃墟があり、その一つにヒムヤル文字の2つの刻銘がある)が、この道路を警備する施設の跡であろうと推定している。(Bowen, "Ancient Trade Routes in South Arabia," *ADSA*, pp. 36-37) またこの隊商路には上述のマブラカフ峠の手前(アデンから見て)で、ハドゥラマウト方面からカタバーンの首府ティムナを経てくる道路が合している。この峠のアデン側には Hajar Bin Humeid の農耕都市の遺跡があり、ここの発掘に参加し、その報告書をまとめたヴァン・ビークは、峠の入口を扼するこの都市には、隊商に対する徴税や警備のためのカタバーン王国の施設が設けられていたろうと推測している。もっとも発掘はごく一部分しか行なわれなかったため、そのような施設と思われる建造物は発見されなかった。(Van Beek, *Hajar Bin Humeid*, p. 368.)

64) *Periplus*, 49.

ーザで輸入されているが、それは少量で、その理由としてブドウ酒がこの地方でもかなりできるからと記されているから、上述のアラビアのブドウ酒は、あるいはムーザかハドゥラマウトのカネーからもたらされたのかも知れない。

輸出品 次にムーザの輸出品としては、*Periplus* には次の品々があげられている。

優秀なまたありふれたパープル染の品、本物のや普通のや基盤縞のや金糸を織りこんだのなど、さまざまなアラビア風の袖つき衣、サフラン、キュペロス kyperos、綿布、外套、本物のやこの地方向けの少量の毛布、縁つきの帯、中ぐらいの量の香油、十分多量の貨幣、少量のブドウ酒と麦⁶⁵⁾。

以上の輸出品のうち、「パープル染の品」のパープルは、Murex trunculus および Purpura haemastoma の2種の貝のはき出す液からとられた真紅色の染料で、これらの貝はフェニキアのテュロス Tyros、アフリカの Meninx および Gaetulia、ギリシアのラコニア地方の海で採取された。この染料は織物の染色材料として、古代の地中海世界ではすこぶる珍重され、アウグストゥス帝のころに没した Cornelius Nepos は、かれの青年時代にこの染料がすこぶる愛好され、1ポンド100ディナリしたといっていることを、プリニウスが伝えている⁶⁶⁾。次にサフランは、この花の雄ずいと雌ずいが薬品、染料、料理の調味料、香膏の製造に用いられ、やはり古代から珍重されている。プリニウスはサフランが蜂蜜、その他の甘味料にはよく溶けないが、ブドウ酒や水にはよく溶け、薬品としてすこぶる有用であること、あらゆる炎症、とくに眼の炎症に効果があり、また咽喉部、胸部、腎臓、肝臓、肺臓、膀胱などの潰瘍にも効くこと、などを書いている⁶⁷⁾。またキュペロスにつ

65) *Periplus*, 24. 村川氏著, 93-94頁。ショッフの英訳も大体同じようであるが、キュペロス sweet rush、綿布 muslins、「縁つきの帯」を sashes of different colours と訳している。かれはまた「十分多量の貨幣」χρῆμα ἱκανόν を省いている。(Schoff, p. 31.)

66) Schoff, pp. 156-57; 村川氏著, 159頁; Plinius, N. H., IX, lx, 127 & lxiii, 137.

67) Schoff, pp. 110-11; 村川氏著, 159頁; Plinius, N. H., XXI, lxxxii, 137.

いては、ローマの古典作者たちの記述に多大の混乱があるが、ショッフはこれを *Andropogon Schoenanthus* という一種の藪と考へて、これを *sweet rush* と訳している。プリニウスはこの植物がインドやアラビアにも生育するが、シリア産のものがもっとも優れているといっている。また別のところでは、ロードス島や Thera 島やエジプトで産するといひ、薬剤として脱毛剤に用いられ、またその根は蛇にかまれたり、さそりに刺された時の解毒剤、あるいは利尿剤など、さまざまに用いられると書いている⁶⁸⁾。

Periplus に記されたムーザの輸入品を見ると、さまざまな織物や衣服、外套、毛布、帯など、アフリカ側の取引地と同じような傾向を示しているのが、とくに目につく。これらのものの実態を明らかにすることは困難であるが、しかし、アフリカ側の同種の輸入品と比較すると、ムーザの輸入するものの方がはるかに上等のものが多く、贅沢品といえるものも相当に見られることが、注目される。パープル染料で染めた品、とくに優秀と記されているものや、錦糸を織りこんだ衣服などは、これに属するといつてよかろう。またアフリカ側の取引地では、その地方の手工業の原料となる銅や鉄などが輸入されているが、ムーザではそのようなものは見られず、サフラン、キュペロスのような薬剤や、中ぐらいの量とことわってあるが、香油が輸入されている。このようなことは、アフリカ側に比較して、ヒムヤル王国の文化や生活程度が、相当に高かったことを示すものといつてよかろう。古典作者たちは、南アラビア地方が香料の輸出によってすこぶる豊かであり、あたかも黄金郷であるかのように描いている⁶⁹⁾。もとよりそれはあまりにも誇張された、とうてい信じがたい話であるが、American Foundation for the Study of Man の南アラビア遠征隊によって第二次大戦後発掘されたカタバーン王国の首府ティ

ムナやサバ王国の首府マーリブの遺跡からは、地中海世界から輸入され、あるいはその影響を受けたと思われる美術工芸品が相当数発見されており、また灌漑農耕が前2千年紀から行なわれていた徴証も見出され、古代国家の興亡もすくなくとも前1千年紀のはじめごろから見られ、アフリカ側に比べれば、はるかに社会や文化の発達は高度のものがあつたようである。ムーザの輸入品はそうした状態に対応しているといつてよかろう。

Periplus に記されたムーザの輸入品は、その品目から見て、大部分が西方世界から送られたものといつてよかろう。それらの原産地は、ムーザの場合示されていないが、アフリカ側の場合と同様に、エジプト産のもの、あるいはエジプトへ輸入されたものの再輸出品が多いように思われる。なかでも織物や衣服類、香油、麦などは、そのほとんどがエジプト産と考へてさしつかえあるまい。そしてここでもアフリカ側で見られたと同様に、「アラビア風の袖つき衣」のように、とくにアラビア向けのものがつくられていることが注目され、東方向けの製品の製造が特別に行なわれていたことを、うかがうことができる。ただ綿布だけはインド産のものとして考へてよかろう。アフリカ側ではさまざまな名称をもつたインド産の綿織物の輸入が見られる。ムーザの場合には単に「綿布」とだけ記されているから、それらがどのような種類のものであつたかは明らかではないが、ムーザからバリユガザへ船が送られると *Periplus* には記されているから、これらの船が持ち帰つたものもあつたろうし、あるいはインド船のもたらしたものもあつたであろう。最後に「十分多量の貨幣」が輸入されていることが注目に値する。ショッフはいかなる理由かわからないが、これを省略しているが、貨幣はソマリーランドの取引地にも輸入されており、西方世界でとくに需要のあつた没薬の輸出港であつたムーザに、貨幣が輸入されたことは、当然考へられることである。村川堅太郎氏もこのことを指摘しておられる⁷⁰⁾。

68) Schoff, pp. 111-12; 村川氏著, 159頁; Plinius, *N. H.*, XII, xlvi, 104 & XXI, lxx, 117~18.

69) たとえば Diodoros, III, 47; Strabon, XVI, 4, 19; Plinius, *N. H.*, VI, xxxii, 162 など参照.

70) 村川氏著, 160頁.

しかも「十分多量の」という形容詞がつけられていることは、没薬の西方世界への輸出がやはり相当多量に上り、西方の商人はこれを購入するために、他の品物だけでは十分でなく、貨幣を多量にもって行かなければならなかったことを、示すものといってよかろう。すなわち、ヒムヤル王国の西方世界に対する出超は、相当に大きかったといってさしつかえないようである。

Periplus が書かれたころのヒムヤル王国では、以上に述べたところから知られるように、アデンは昔日の面影を失ってしまったが、紅海岸のムーザが臨海取引地として活況を呈し、ムーザの商人は対岸のソマリーランド沿岸や、とくにその南方にひろがるアザニア沿岸、および西北インド方面と活発に貿易を行ない、西方の商人もここを訪れて、この地方の特産物である没薬などの取引を盛んに行なっていた。そしてヒムヤル王はアデンの征服を受けてローマ帝国の強勢を知り、その後はこれと友好関係を保持することに努めていたようであり、ムーザが「法律で定まった臨海取引地」とされたのは、こうした両者の友好関係の所産であったと考えられる。西方の商人はまたバブ・エル・マンデブ海峡に臨むオケーリスを碇泊地や給水地として利用することを認められており、インドへの渡航に大きな便宜をえていたのである。

ハドゥラマウト王国沿岸

沿岸の状況 エウダイモーン・アラビアーを過ぎると、アラビア海の沿岸には長い渚と 2,000 スタディオン、あるいはそれ以上にわたって湾が延びており、その突き出した岬のあとに取引地カネー Kanē があり、そこは「エレアゾスの王国に属して乳香産地に位して居る」こと、またその上手の奥地には首都のサッバタ Sabbatha があることが、*Periplus* に記されている⁷¹⁾。さらにそれから東方の沿岸地方にかけて、サカリテース Sachalitēs 湾、大きな岬のシュアグロス Syagros、次いでオマナ Omana 湾、モスカ Moscha 港があげられ、またシュアグ

ロス岬に向かった大海中にディオスクーリデーヌ Dioskūridēs 島があげられている⁷²⁾。

上述のエレアゾス Eleazos は、グラザーによってこの地方の碑文に見られる Ili-azz という王名（アラビア語で「わが神は強力なり」という意味）に当るものとされ、この名前をもったハドゥラマウト王は数名を数えるが、*Periplus* に出てくるエレアゾスはそのうちの Ili-azz Jalit に比定され、この王は紀元25年から65年にかけて王位にあったと推定されている⁷³⁾。またハドゥラマウト王国については、ストラボンは Chatramotitai または Chatramotitis の名称で伝え、その首都を Sabata としており、またプリニウスも Chatramotitae のほか、Atramitae または Astramitae という名称で言及しており、その首都は Sabota で、そこは60の神殿のある、城壁で囲まれた町であることを記し、また別のところではサボタから8日行程のところに乳香産地のあることを書いている⁷⁴⁾。いずれにしても、ハドゥラマウトは古くから乳香産地として知られており、カネーばかりでなく、以上にあげた地名はいずれも当時はこの王国に属していたと考えられる。とくにこの国は紀元1世紀のはじめに崩壊したと推定されるカタバーン王国の領土の一部をあわせ、既述のヒムヤル王国と並んで当時は、南アラビア地方の繁栄した国家であったようである。

次に第一にあげられている取引地のカネーについては、そこに2つの無人島があり、一つは「鳥の島」と呼ばれ、もう一つはトゥルールラス Trullas と呼ばれて、カネーから120スタディオンはなれていると、*Periplus* には記されている⁷⁵⁾。この取引地については、プリニウスもインド航路の記述のところで乳香産地の港の一つとしてあげ、ベルニーケーから30日ほどでここに達すると記しており、またプトレマイオスも

72) *Periplus*, 29, 30, & 32.

73) Schoff, p. 117; 村川氏著, 163頁.

74) Strabon, XVI, 4, 2; Plinius, *N. H.*, VI, xxxii, 155 & 161; XII, xxx, 52.

75) *Periplus*, 27. 村川氏著, 96頁; Schoff, p. 32.

71) *Periplus*, 27. 村川氏著, 96頁; Schoff, p. 32.

これを取引地および岬としてあげている⁷⁶⁾。グラザーやショップはこれをこの地方の今日の港であるムカッラ Mukalla の西方の Bir 'Ali にほど近い Hisn Ghorab (14°10' N., 48°20' E.) に比定している。ここは両側に岬が突き出ており、また *Periplus* に述べられているように、沖に島があるので、風を防ぐ良港である。また島の島は Gibus 島、トゥルールラス島は Halany 島を指していると考えられるが、前者は海拔 450 フィート (150メートル) あり、海鳥の糞でおおわれているので、この名前と呼ばれたのであろう⁷⁷⁾。1835年にこの地方を旅行した Wellsted は、Hisn Ghorab は高さ約150メートルの岩だらけの火山の噴火口で、そのわきには舗装した道路の痕跡があり、その附近で2個の碑文を発見したが、その一つに「Qana」と記されていたこと、また噴火口の上にはたくさんの建造物の廃墟があることを述べ、さらにこれらの建造物の一つは方形の塔で、海を見おろす断崖の縁にあり、監視と燈台の2つの役目をもったものであったろうと推定している⁷⁸⁾。いずれにしても、カネーはハドゥラマウト王国の商港として当時繁栄していたようで、この商人が西北インド方面やペルシア湾方面と商業取引を行っていたことが、やはり *Periplus* に記されている⁷⁹⁾。

次にカネーの内地にあるとされている首都のサッパタは、今日の Shabwa に比定されている。シャブワはヒスン・ゴラブの北々西5日行程のところであり、ハドゥラマウト地方のもっとも代表的な溪谷である Wadi Hadhramaut の西

方の Wadi Rakhiya の溪谷にその遺跡があるが、いまはこの地方はすっかり荒廃してしまっている。現在シャブワの周囲は10数マイルにわたって不毛の砂漠をなしており、附近には岩塩鉱が豊富で、しかもハドゥラマウトではここが唯一の岩塩の産地であるが、水は塩分を含んでおり、とくに乾燥期の数ヶ月間はすこぶる塩からくなって、ほとんど飲用に堪えなくなる。このようにシャブワの自然環境はよくないが、ボウエンはこの状態は2,000年前も同じようであったろうと推測している。またこの遺跡も小規模でわずかに20エーカーにすぎず(これに反してカタバーンの首府ティムナの遺跡は50エーカー、マーリブの遺跡は200エーカー)、この附近でフィルビーが発見した碑文は、年代的には比較的新しい、紀元前1世紀から紀元後の数世紀間のものであり、W. F. Albright はシャブワの遺跡の大部分はおそらくローマ時代のものであろうと推定している。しかもここはハドゥラマウト王国の領域としては、あまりにも西方にかたよりすぎており、その上その東方にはかなりの距離にわたって古代の大きな耕作地や居住地の痕跡も見られない。ただここがハドゥラマウト王国の奥地やカネー方面からの隊商路の通過地点であり、それと上述の岩塩鉱の存在が、ここを首府として選ばせたのかも知れない⁸⁰⁾。プリニウスはハドゥラマウト地方で集められた乳香が、ラクダでサボタ、すなわちシャブワに運ばれ、そのためこの町の門の一つが開かれていること、乳香を積んだラクダで、公道をそれるものに対しては、王が重刑を課することを記しているから⁸¹⁾、シャブワは乳香の集散地としての役割を演じていたと考えられる。

Periplus には、カネーのあとでは「陸地がさらに後退し、別の長距離に亘って極めて深く入り込んだ所謂サカリテース湾と乳香地方が続」き、「沿岸を航海する人たちには疫病を起し、

76) Plinius, *N. H.*, VI, xxvi, 104; Ptolemaios, VI, 7, 10.

77) Schoff, p. 116; 村川氏著, 162-63頁. パンバリーもカネーを Hisn Ghorab に比定し、ここには顕著な岩の砦と、その下に相当な都市の遺跡があるといっている。(E. H. Bumbury, *A History of Ancient Geography*, Vol. II, p. 457.)

78) J. R. Wellsted, "Narrative of a Journey from the Tower of Ba'l-haff, on the Southern Coast of Arabia, to the Ruins of Nakab al Hajar, in April 1835," *Journal of the Royal Geographic Society*, 7 [1837].—Bowen, "Ancient Trade Routes in Southern Arabia," *ADSA*, p. 38 による.

79) *Periplus*, 27 & 28. 村川氏著, 96-97頁; Schoff, pp. 32-33.

80) Bowen, *op. cit.*, pp. 39-40; W. F. Albright, "The Chronology of Ancient South Arabia in the Light of the First Campaign of Excavation in Qataban," *BASOR*, no. 119 [1950], p. 14, note 30; W. Phillips, *op. cit.*, p. 50.

81) Plinius, *N. H.*, XII, xxxii, 63.

其処で働く者には絶えず死を齎す」おそろしく不健康なところであること、またサカリテース湾にはシュアグロスと呼ばれる「東に向いた非常に大きい岬」があって、この地方の要塞と港と乳香の貯蔵所とがあること、シュアグロスのあとではすぐ続いて「陸地に深く入り込んだオマナ湾」があり、その横断は600スタディオンであること、その次には「高くて岩の切り立った山々」があり、500スタディオンにわたって住民が穴居生活をしていること、その次に、「サカリテースの乳香の積込みに指定された碇泊地」であるモスカ港があることが記されている⁸²⁾。

以上にあげた地名のうち、シュアグロス岬とそれに続くオマナ湾については、学者の間に意見の相違はなく、シュアグロス岬は Ras Fartak (15°36' N., 52°12' E.) に、またオマナ湾は Qamar 湾に比定されている。Ras Fartak は *Periplus* に述べられているように、「非常に大きい岬」ではないが、この岬にある山は高さ約2,500フィート(760メートル)で、遠方からもよく望見でき、カマル湾の西端に位置しており、プリニウスのインド航路発達の4段階のうち、第2、第3段階でアラビア半島沿岸からインド洋に乗り出す地点とされているところである⁸³⁾。またその東方のカマル湾は「陸地に深く入り込んでおり」、この湾の沿岸にある「高くて岩の切り立った山々」は、この湾の東部沿岸の Jebel Qamar および Jebel Qara を指しているものと考えられ、これらの山々は高さが3,000フィート(900メートル)以上ある。今日アラビア海沿岸の東部からペルシア湾口にかけてオーマン士侯国があるが、オーマンは当時のオマナ湾という旧名が伝わったものと考えられる⁸⁴⁾。また「サカリテースの乳香の積込みに指定された碇泊地」であるモスカ港は、カマル湾の東部沿岸を占めるゾファル Dhofar 地方に求められてお

り、村川堅太郎氏はこの地方の今日の中心都市である Salala の附近の東経54°あたりにその位置が求められるべきであるとし、またショップはサラララの東方の Taka の町から東へ2マイルのところにある Khor Reiri (17°2' N., 54°26' E.) に比定している⁸⁵⁾。ここへはカネーから2、3の船が送られ、また南インドや西北インドのバリユガザから冬季遅くなって到着する船は、ここで冬を避け、「王の役人から綿布や麦や油の代りに乳香を船荷に受け取って行く」と、*Periplus* に記されている⁸⁶⁾。

しかし、サカリテース湾については、*Periplus* には「別の長距離に亙って極めて深く入り込んだ」湾と記されているが、その距離がどれほどかの記述はなく、またカネーの東方には Ras Fartak にいたるまで、「極めて深く入り込んだ」湾に相当するところも見当らない。さらに *Periplus* には、オマナ湾の東方に「サカリテースの乳香の積込みに指定された」モスカのことが記されているから、サカリテースは単にラス・ファルタクの西方の沿岸を指すだけでなく、その東方のカマル湾の沿岸一帯をも含んでいたと考えることができよう。プトレマイオスもサカリテースについて書いているが、かれはかれに東方世界の情報を提供した Marinus が、サカリテースをシュアグロス岬の西方にあるとしているのを斥けて、反対にこの岬の東方にあるアラビアの一地域であるとし、このことに関しては、この地方を航行するすべての人々の意見が一致していると書いているから⁸⁷⁾、かれはカマル湾の沿岸をサカリテースとしているようである。このようにサカリテースについての古典作者の記述は、あいまいであり、混乱しているが、ショップはこれをラス・ファルタクより西方の地方から、この岬をはさんで、その東方のカマル湾の沿岸一帯を含む地域と考えて、Ras el Kelb (14°0' N., 48°45' E.) から Ras Hasik (17°23' N., 55°10' E.) までの沿岸一帯を指したも

82) *Periplus*, 29, 30, & 32. 村川氏著, 97-98頁, 100頁; Schoff, pp. 33-35.

83) Schoff, p. 133; 村川氏著, 170頁; Plinius, *N. H.*, VI, xxvi, 100~101. なお本稿(1), 40頁参照.

84) Schoff, pp. 139-40; 村川氏著, 172-73頁.

85) 村川氏著, 173頁; Schoff, p. 140.

86) *Periplus*, 32. 村川氏著, 100頁.

87) Ptolemaios, I, 17, 2.

のとしている。また村川堅太郎氏も同様の考えから、ラス・エル・ケルブからカマル湾の東端にある Merbut または Ras Nus (17°20' N., 55°15' E.) にいたる海岸をこれにあてている⁸⁸⁾。

ところで、American Foundation for the Study of Man の南アラビア遠征隊は、ショップがモスカに比定した上述のホル・レイリで1952～53年に発掘を行なった。この発掘は美しいホル・レイリ湖を見おろす高所にある遺跡で行なわれ、先イスラム時代の一神殿が発掘され、また、2個の祭壇や銅貨などのほか、この都市の内門の壁に刻された7個の銘文が発見された。これらの銘文にはハドゥラマウト王の名前と考えられる Ilazz という名前や、同様にハドゥラマウトの月神である Sin という名前、それに SMRM (Sumuhram) という都市名と S'KLHN (Sa'kal) という地方名が記されていた。そこで遠征隊はここがかつてハドゥラマウト王国に属しており、またこの地方が古代において S'KLHN と呼ばれていたものと推定した。そればかりでなく、W. F. オールブライトはこの S'KLHN をギリシア語化したものが、上述のサカリテースであろうと推定している。このように考えれば、この遺跡の位置しているところが、古典作者の書いているサカリテースに属しているということになり、したがってまたサカリテースをラス・ファルタクの東方としているプトレマイオスの記述の方が、*Periplus* の記述よりも真実に近いということにもなるであろう。プトレマイオスは *Periplus* の作者よりものちの2世紀の人であるから、このころになると、いっそう多くの西方の船舶がアラビア海域へ進出するようになっていたと考えられる。したがって、プトレマイオスが実際家である *Periplus* の作者よりも、この地方についていっそう確実な知識を持っていたとしても、不思議ではなからう。しかし SMRM という都市名は、これを既知の古代の都市名に求めることができず、発掘者たちを悩ましたが、この遺跡がおそらくこの名前と呼ばれていたものと考えられ、ここは

おそらく *Periplus* のモスカ港の要塞に相当する部分で、その下の方に港の施設や倉庫などがあり、そこがあるいはモスカと呼ばれたのではなからうかと、遠征隊は推測している⁸⁹⁾。

ホル・レイリの遺跡は、その後1960年に再び American Foundation の遠征隊によって、上述の要塞と推定された高所の部分の発掘が行なわれた。この発掘によって、城壁の東側および北側に、城壁からはなれて別に、おそらく防備のための塔が設けられていたこと、城壁内には建造物が密集していたことが判明したほか、奉納の刻銘のある銅板、月神 Sin の刻銘のある直径10センチの青銅製の鈴、秤の分銅と思われる重さ3キロほどの堅い金属製の物体(その一端には雄羊の頭部を象ったと思われる、丸味を帯びた突起がある)、多数の土器(その多くは料理用のかめや大きな壺)などが発見された。これらの伴出物のうち、分銅と思われるものには、月神 Sin のほか、役人と思われる人物の名前を現わした yšhr'l という刻銘があったが、これらの文字のうちとくに š の書体から、この分銅の製作がキリスト紀元のはじめよりおそくはないものと推定された。

また土器の中には、明らかに西方世界からもたらされたと考えられる4個の破片が含まれていた。そのうちの3個は城壁の北西隅のすぐ内側の発掘地域の最下層から発見された。これらの土器を詳細に調査した Howard Comfort は、4個のうちの2個は、光沢のある赤い terra sigillata (アレティウム土器)で、雲母を含んだ粘土でつくられており、紀元前から紀元後へのキリスト紀元の転換期のものであり、そのうちでも遅い方の時期に属し、アナトリア沿岸かその沖あいの島、多分サモス島でつくられたもので、おそらくアレクサンドリアを経て、海上からここへ運ばれたものであろうと推定した。第3片はきわめて薄手で、雲母の痕跡はなく、色は前2者よりもいく分黄味がかっている。これ

88) Schoff, p. 129; 村川氏著, 169頁.

89) W. Phillips, *op. cit.*, p. 306; Gus W. Van Beek, "Ancient Frankincense-Producing Areas," *ADSA*, Appendix II, p. 141.

はイタリア産のものと考えられ、前の2つと同時期のものであろうと推定した。また第4片は色は第3片と同じようであるが、焼成が粗雑であり、イタリアの多数の遺跡からこれに類するものが多数発見されている。

遠征隊はこのほかサラララの北方36マイル(58キロ)の Hanun で、乳香の貯蔵所と推定される小さな建造物(その規模は26.5×13メートルで、9つの細長い室に分かれている)の遺跡を発掘し、またホル・レイリの北々東43マイル(69キロ)の Andūr のオアシスで、小さなけわしい山峯の上にある、ホル・レイリの建造物と同時代に属すると推定される岩と思われる遺跡(ここは西方のハドゥラマウト王国の首府シャブワおよび北方のペルシア湾方面にいたる隊商路上に位置している)を調査した。そして以上の3つの遺跡だけが、この地方の先イスラム時代の遺跡であり、なかでもホル・レイリの遺跡は、キリスト紀元のやや以前にコロニーとして建設されたものであろうと推定した⁹⁰⁾。以上の推定が正しければ、ホル・レイリにあったとされるモスカ港は、西方世界の商人のアラビア海域での活動が活発化しつつあったところに、建設されたということになり、したがって、それまでは主として陸路を隊商輸送されていた乳香を、西方の商人が直接海路来航してこれを求めるようになったのに応じて、乳香産地に近いこの地に、その積出しのためにこの港が建設されたという推定もなりたつであろう。いずれにしても、この遺跡から発掘された4片の土器の破片は、この遺跡の年代を推定する有力な手がかりを提供してくれたばかりでなく、またこの遺跡と西方世界との海上からの接触を物語ってくれるものとして、まことに興味深いものがある。

次にシュアグロス岬に向かって大海中にディオスクーリデース島のあることが、*Periplus*には記されている。*Periplus*のこの島に関する

記事はかなり詳細である。すなわち、この島はシュアグロス岬とその対岸のアローマタ、すなわちソマリーランドのガエルダフェイ岬に近い香料取引地との中間に位し、どちらかといえばシュアグロスに近いこと、この島にはブドウも麦も産しないが、水が豊かで、鱈や多数の毒蛇や大きいとかげのほか、たくさんの亀を産すること、などが記されている⁹¹⁾。プリニウスもこの島について書いているが、かれはそれがアザニア海にある島で、シュアグロス岬の突端から280マイルのところにあると述べている⁹²⁾。上述のように、この島は、アローマタよりシュアグロス岬に近いと *Periplus* ではされているが、むしろアフリカ側に近いソコトラ島に比定されている。

ところで、エジプト第13王朝(前18世紀)のある物語に出てくる、香料国の王の郷土である、Pa-anch という「Geniusの島」や、ギルガメシュの物語に出てくるバビロニアのオデュセウス(海の放浪者)が到達したもっとも遠隔の地である「幸福の島」は、ソコトラ島ではないかといわれている⁹³⁾。それはともかくとしても、第1章で述べたように、Dioskūridēs という名称は、サンスクリット語の Dvipa Sukhādāra(「幸福の島」という意味)の転訛とも考えられ、また前2世紀のアガタルキデスが、各地の船乗りが訪れ、とくにアレクサンドロス大王がインダス河口に建設した Potana の船がやってくると書いている、サバ国の近くにある「幸福の島々」も、ソコトラ島を指していると考えられる⁹⁴⁾。このようなことから考えると、沿岸からかなり遠くはなれたアラビア海中のソコトラ島が、早くから人々の来航した島であったことが推測され、インドやアラビアの商人がこの島の物産である亀甲などを求めて、来航したものと思われる。また西方世界の商人がこの海域に進出するようになると、やはりこの島を訪れるようになったのであろう。*Periplus*には、この島

90) Ray L. Cleaveland, "The 1960 American Archaeological Expedition to Dhofar," *BASOR*, no. 159 [1960], pp. 14~26; Howard Comfort, "Some Imported Pottery at Khor Rori (Dhofar)," *BASOR*, no. 160 [1960], pp. 15-20.

91) *Periplus*, 30. 村川氏著, 98-99頁; Schoff, pp. 33-34.

92) Plinius, *N. H.*, VI, xxxii, 153.

93) Schoff, pp. 133-36.

94) Schoff, p. 133; 村川氏著, 171頁; Diodoros, III, 47.

の住民がすべて外来者で、アラビア人やインド人やギリシア人の混合であると記されており、また以前はムーザの商人たちのあるものがここで商業を行ない、また南インドやバリユガザから「偶々此処に到着した人たちが取引を行」なったことが記されている⁹⁵⁾。いずれにしても、*Periplus* の書かれたころは、ソコトラ島はアラビア、インド、および西方世界の商人の交易地であったことがうかがわれるのである。

Periplus にはまたこの島が「乳香地方の王に属して居る」と記されているから、当時はハドゥラマウト王国に属していたことが知られるが、これに続いて「今では此の島は王により賃貸せられ且つ警備されて居る」という記述が見られる⁹⁶⁾。この部分の解釈について、コルネマンはこれをネロ帝の東方政策の一環と考え、「賃貸」は王がローマ帝国に対して行なったのであり、「警備」はローマ軍が自ら行なっているか、あるいはすくなくとも、王がローマ商船の利益のために行なっているのであろうと推定している⁹⁷⁾。W. Schur もこれをネロ帝の東方政策の現われと見る点では、コルネマンとかわりはないが、かれはアフリカ沿岸のアザニアー地方が、ヒムヤル王やマパリーティスの藩王に属しているのを、ムーザの商人が貢納の義務つきで手に入れたのと同じような形式で、ローマの商人組合がソコトラ島を賃借しているのであって、これを警備しているのはローマ帝国から派遣された軍隊ではなくて、この商人組合の傭っている私兵であろうと推定している。そしてこのようなことになったのは、ローマのヒムヤル王国の征服——アデンの征服を指している——と関連があり、この遠征に際してローマはハドゥラマウト王国とも友好条約を結んでこの特権を獲得し、これによって「インドおよび東アフリカ商業の結節点」であるこの島を掌握して、インド

洋に進出してきたエチオピアのアクスーム王国が、この重要な島に支配権をおよぼさないように手を打ったのだという推定を行なっている⁹⁸⁾。またロストフツェフはこの賃貸・警備がローマ帝国の手によるものであると考え、アデンと多分ソコトラはローマによって占領され、船乗の給水地や避難地として用いられ、ちょうどクリミアの陸海軍の根拠地のように、その根拠地が船乗を守るのに役だったと推定している⁹⁹⁾。

このように、ソコトラ島にはローマの勢力がおよんでいたとする見解が有力であるが、このような見解に消極的な、あるいはこれを否定する学者もいる。村川堅太郎氏はコルネマンの見解に関連して、*Periplus* の記事だけでそのように確言することはできないという消極的な見解を述べられている¹⁰⁰⁾。またウォーミントンはシュールの所説に関連して、「アラビア・エウダイモーンの施設を撤去したのに続いて、ヒムヤル、ハドゥラマウト、およびソコトラをローマの保護領としたとの説を、シュールとともに支持することができるとは考えられない」と述べて、これを斥けている¹⁰¹⁾。さらにショッフは、ハドゥラマウト王国がヒムヤルおよびパルティアという2つの敵に対して、この島を警備していたと推定している¹⁰²⁾。

しかし、ショッフのように解した場合、「王により賃貸」されていたという語句を、どのように考えるべきかという問題がやはり残されるであろう。「今では王により賃貸せられ且つ警備されて居る」と書かれている以上、ハドゥラマウト王がだれかにソコトラ島を賃貸し、そのものがここを警備するか、あるいは王がかわって警備をしていたと考えるのが、自然であろう。

95) *Periplus*, 30 & 31. 村川氏著, 99-100頁; Schoff, pp. 33-34.

96) *Periplus*, 31. 村川氏著, 99-100頁. ショッフはこの部分を“Now the island is farmed out under the Kings and is garrisoned.”と訳している.

97) E. Kornemann, *a. a. o.* S. 71—村川氏著, 172頁による.

98) Werner Schur, *Die Orientpolitik des Kaisers Nero*, Klio, Beiheft XV, 1923, S. 47~48. ただし、シュールが想定しているように、紀元1世紀にアクスーム王国がインド洋に進出してきたということは考えられない.

99) M. Rostovtzeff, *The Social and Economic History of the Roman Empire*, Vol. I, 2nd ed., 1957, p. 97.

100) 村川氏著, 172頁.

101) E. H. Warmington, *op. cit.*, p. 18.

102) Schoff, p. 139.

その場合、この島に住んでいるものがアラビア人、インド人、およびギリシア人であり、かれらは商業のためにここに来住したと考えられるから、これらの人々か、あるいはここを交易の場としている人々が、賃貸の相手方になったと考えるのが、ふさわしいのではなからうか。したがって、これをローマ帝国の政策の一環とすることは、もとより飛躍に過ぎるであろう。ソコトラ島は、後述するように、亀甲の産地であるとともに、西方世界の商人のインド洋横断航路がその近くを通っていたと考えられるから、西方の商人がこの島を重要視したことは疑いがないからう。その点でかれらがこの島を賃貸し、警備をしたと考えることのできる理由は十分にあるが、賃貸の相手方をローマ帝国とするのももとより、西方世界の商人だけに限定することも、この記事だけでは十分ではなからう。インドの商人にとっても、またムーザやカネーのアラビア商人にとっても、この島が重要であったことは、いうまでもなからう。

輸出品 次にハドゥラマウト王国の沿岸取引地で扱われた貿易品について考察してみよう。*Periplus*には、この国の沿岸ではカネーの記事の中に、この港で扱われる貿易品があげられているほか、ディオスクーリデース島の記事の中に、この島の産物があげられているが、それらは輸出の対象となったと考えられるので、あわせて考察したい。

まず輸出品または産物としてあげられているものは、次のとおりである。

カネー——この地方の特産物としての乳香とアロエー aloē, 他の商業地からきた品々
ディオスクーリデース島——真正の亀, 陸亀,
はなはだ多量の白亀, 山亀, いわゆるインドのキンナバリ kinnabari¹⁰³⁾

以上のうち、カネーの輸出品としてあげられている乳香は、没薬と同様にソマリーランドにも産したこと、またアラビアが没薬とともに乳香の産地として、早くから西方世界に知られて

いたことは、第6章で述べたとおりである。しかし、乳香と没薬は同じアラビアでも産地を異にしていたのであって、乳香はかつてのハドゥラマウト王国の領内に産したことは、すでに言及したとおりである。*Periplus*にはカネーの東方にサカリテース湾と乳香地方が続いており、「此の地方は山地で近づき難く、空気は重苦しくて霧っぽく樹木から乳香を産する。乳香を産する樹木はさして大きくも高くもないが、丁度我々の土地のエジプトで或る種の樹がゴムを流し出すやうに、樹皮に凝固した乳香を産する」と書かれている¹⁰⁴⁾。この書にはまたシュアグロス岬に乳香の貯蔵所があること、またモスカは「乳香の積込みに指定された碇泊地」であり、サカリテース湾一帯には乳香がうず高く横たわっていることが記されている¹⁰⁵⁾。*Periplus*にはそのほか、カネーの記事の中に「此の地方で出来る乳香は総て駱駝や此の地方特有の革囊で作った筏や船でいはばその集荷地たる此の地に運び込まれる」とも書かれているから¹⁰⁶⁾、ハドゥラマウトの西部沿岸に位置しているカネーは、乳香産地ではなくて、むしろその集荷地であり、輸出港であったことがうかがわれ、乳香産地はそれより東方の沿岸地帯や内地にあることを示唆してくれる。

プリニウスも乳香に関してすこぶる詳細な記事を残しているが、産地については「かの地方(アラビア—引用者)のなかほどのあたりに、Sabaeiの地方のAstramitaeがおり、かれらの国土の首府はSabotaで、そこは高い山の上にある。そしてサボタから8日行程のところには乳香産地があり、そこはサバエイに属している地方で、Saribaという。ギリシア人によれば、この名前は秘儀という意味である。この地域は北東に面し、貫くことのできない岩で囲まれており、右手は近よりがたい断崖のある海岸に接している。(下略)」と書いている¹⁰⁷⁾。これによ

104) *Periplus*, 29. 村川氏著, 97-98頁.

105) *Periplus*, 30 & 32. 村川氏著, 98頁および100頁.

106) *Periplus*, 27. 村川氏著, 96頁.

107) Plinius. *N. H.*, XII, xxx, 52.

103) *Periplus*, 28 & 30. 村川氏著, 97頁および99頁.

れば、乳香産地はサバエイすなわちサバ人の国に属しているように受けとれるが、これは乳香や没薬がサバ人の手を通して陸路を西方に運ばれたために、西方世界ではこれらがサバ人の国に産すると思われていたためであったと考えられ、乳香産地は実際はアストウラミタイ、すなわちハドゥラマウトにあったことが、上述の記事からもうかがわれる。しかもその産地は首府のサボタから8日行程と書かれていて、その方向は示されていないが、サボタ、すなわちシャブワがハドゥラマウト王国の西端に近い位置にあることから考えれば、シャブワのかなり東方、ワディ・ハドゥラマウトを東方へかなり下った方面の海岸地帯にあったことが推測される。またプトレマイオスのアジアの第6地図でも、乳香産地(liba-nophoros)は、かれがシュアグロス岬の東方にあるとしているサカリテースのペルシア湾よりの方向に置かれている。

ところで、近代のこの地方の探険は、乳香樹が *Periplus* のオマナ湾、すなわちカマル湾沿岸の東部のゾファル Dhofar 地方に生育していることを明らかにした。すなわち、19世紀半ばの H.J. Carter およびそれより1世紀後の Bertram Thomas は、アラビア半島で乳香が生育している地域は、東経53°と55°21'の間のゾファルの沿岸の平野および Qara 山脈の斜面であり、それは大体 Damghut と Merbut のすぐかなた(東方)の一地点との間で、標高2,000~2,500フィート(610~760メートル)のところであることを明らかにした¹⁰⁸⁾。ヴァン・ビークはこれを容認するとともに、乳香樹の生育は特殊な地

理的・気候的諸条件、すなわち、東西の季節風によって生じる湿度と温度、および土壌の3つの特殊な組みあわせを必要とし、これらの諸条件を満たしているのは、上述の地方だけであり、したがって古代の乳香産地もこの地方に限定されることは、疑いの余地がないと述べている¹⁰⁹⁾。ヴァン・ビークの以上の見解が正しいかどうか、筆者にはなんとも判断できない。また将来ハドゥラマウトの他の地方で乳香樹が発見されるかどうかは別として、さきに述べたホル・レイリの発掘によって、ここがハドゥラマウト王国に属する古代のサカリテース地方に位置していることは、ほぼ疑いがなく、このことと *Periplus* およびプリニウスの乳香産地に関する記事やプトレマイオスの地図に見られる乳香産地の位置とを考えあわせれば、ホル・レイリを含むゾファル地方が古代のハドゥラマウトの乳香産地であるとするのは、おおむね認められるとよからう。

プリニウスは乳香の採取についても書いている。それによれば、乳香は販売の機会がすくなく、年1回だけ採取されたが、現在は2回収穫すると記されている。乳香や没薬が南アラビア人の間で宗教儀礼に早くから使用されていたことは、この地方で発掘された多数の香炉の存在からうかがわれるが、西方世界でも早くから用いられていた。そしてその需要が高まるにつれて、はじめは年1回しか採取されな

108) H. J. Carter, "A Description of the Frankincense Tree of Arabia with Remarks on the Misplacement of the 'Libanophoros Region' in Ptolemy's Geography," *The Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society*, II [1848], pp. 387 ff.; B. Thomas, *Arabia Felix*, London, 1932, p. 123.—いづれも Gus W. Van Beek, "Ancient Frankincense-Producing Areas," *ADSA*, pp. 140~41 および ditto, "Frankincense and Myrrh," *The Biblical Archaeologist*, XXIII, 3 [1960], p. 72 による。なおカーターとトマスの与えている数字は、わずかに西へ3分、東へ2分異なっているだけであると、ヴァン・ビークはつけ加えている。

109) Van Beek, "Frankincense and Myrrh," p. 72. なお中国の文献には、後世のものであるが、宋代の12世紀末に書かれた周去非の『嶺外代答』巻三に、乳香、没薬などが大食諸国中の麻離拔国に産することが記され、また13世紀はじめに書かれた趙汝适の『諸蕃志』巻下には「乳香一名薰陸香。出大食之麻囉拔・施曷・奴發三国深山窮谷中。」と記されている。上述の麻離拔と麻囉拔が同じ場所を指していることは、同じく『嶺外代答』巻三に「哲宗元祐三年(1088)十一月。大食麻囉拔国、遣人入貢。即是麻離拔也。」と記されていることから知られる。麻離拔・麻囉拔は Merbut, 施曷は Shihr, 奴發はゾファルに比定されている。Shihrはカネーの東方の沿岸にあり、ゾファル地方には属していないが、Merbutはゾファル地方に位置している。(cf. F. Hirth & W. Rockhill, *Chau Ju-Kua: His Work on the Chinese and Arab Trade in the Twelfth and Thirteenth Centuries, Entitled Chu-fan-chi*, 1912 [中華民国23年影印], pp. 121 & 195.)

かったものが、2回採取されるようになったのであろう。プリニウスのこの地方の記事は、ヘレニズム時代の資料にもとづいているものが多いと考えられるから、採取に関する記事もそうだとすれば、おそらくヘレニズム時代のいつか、西方世界での乳香の需要が高まるにつれて、こうした変化がおこったのではないかと思われる。没薬も栽培種については年2回採取されたことは、すでに述べたとおりであり、この場合もやはり需要の増大によって生じた変化であろう。プリニウスは続いて、はじめの自然の採取は夏の暑さがきわめて激しいシリウス星の昇るころに行なわれ、樹皮が液汁でいっぱいになっているようなところへ切りこみをつけ、切りこみから脂ぎった泡が吹き出して凝固したのを、ヤシの葉でつくったむしろに受けとめること、夏で来たものは秋集められるが、これがもっとも清純で、色も明るい白色であること、第2回は冬切りこみをつけ、春になって採取されるが、この方は色が赤みがかって前者には比較にならないこと、などを書いている¹¹⁰⁾。

さらにプリニウスは、乳香の取引を開始し、また主としてこれを行なっているのは、3,000家族くらいのものに限られており、かれらは世襲財産としてこの権利を所有していること、したがってこれらの家族のものは神聖で、かれらが乳香樹に切りこみをつける仕事に従事している時は、婦人と交わったり、葬式に出あったりして身を汚すことを許されないこと、森林の乳香はこれらの人々の共有であるという報告もあれば、かれらの間に毎年分配されるという報告もあることを書いている¹¹¹⁾。この記事は乳香の取引や乳香樹の所有が、ある特定の人々に属していることを物語ってくれるように思われる。また *Periplus* には乳香産地がすこぶる不健康な地帯で、乳香は「王の奴隷や刑罰の為に送られた者たちの手で扱われる」と書かれているから¹¹²⁾、乳香樹はおそらく、王室や社会の一部

の特権的支配者層に属していたのではなからうか¹¹³⁾。また乳香の取引や輸出も、王室の独占またはその強力な統制のもとにおかれ、その上宗教的な信仰やタブーによって厳重に規制されていたらしく、*Periplus* にはサカリテース湾一帯に乳香がうず高く積みあげられているが、そこには番人がおらず、神々がそれを見守っており、王の許可がなくてはそれを船に積みこむことはできず、「誰かその一粒を持ち去ったとしても、船は動かなくなる」ということが記されている¹¹⁴⁾。

いずれにしても、乳香はハドゥラマウト王国の特産物として、王室の厳重な統制のもとに取引が行なわれ、早くから陸路を隊商の手で輸送されていた。そしてこの隊商輸送は、かれらが通過する国々に関税、その他で富をもたらしたから、南アラビア諸国の間にはしばしば隊商路の争奪をめぐって戦争が行なわれ、また諸国の興亡が見られたようであり、ボウエンは政治的勢力の交替によって、乳香輸送路に変動のあったことを推定している¹¹⁵⁾。しかし、*Periplus* の書かれたころは、カネーに乳香が集められ、そこから海路輸出されていたわけである。そればかりでなく、ホル・レイリの発掘が示すように、西方世界の商人が海路進出してきた紀元前1世紀の末ごろには、乳香産地のモスカに新たに乳香積みこみの施設が設けられ、そこから原

113) これに反して、没薬は庶民の間で生産されたようにプリニウスが書いていることは、すでに述べたとおりである。

114) *Periplus*, 29. 村川氏著, 98頁。プリニウスも乳香樹の所有者はみな正直で、乳香樹に切りこみをつけてから収穫までの間、だれも盗まないの、番をするものはないことを書いている。(Plinius, *N. H.*, XII, xxxii, 59.)

115) プリニウスはサボタからカタバーン王国の首府ティムナを経て地中海岸のガザにいたる香料の輸送路について述べているが (Plinius, *N. H.*, XII, xxxii, 63~65), ボウエンはこの通路以外に、カタバーンの領土を通らず、ジャブワから Ramlet Sabatein の砂漠を通して Nejr-an 方面にいたる通路、そのほかの通路のあったことを想定し、次のようにいっている。「南アラビアにはただ一筋のユニークな香料の道、すなわち公道は多分なかったことが、明らかであるように思われる。そこには疑いもなく多くの通路があり、南アラビア諸王国の興亡につれて、これらの通路の重要性が変動したであろう。」 R. LeBaron Bowen, *op. cit.*, p. 42.

110) Plinius, *N. H.*, XII, xxxii, 58~60.

111) *Ibid.*, XII, xxx, 54.

112) *Periplus*, 29. 村川氏著, 98頁。

住民の皮の浮袋をとりつけた筏や小さな船で、乳香がカネーに送られるようになっていたのである。したがってこのころになると、乳香の輸出は陸上の隊商輸送によるよりは、むしろ海上からの輸出にその重点が移っていたように思われる。しかし、海上からの輸出もやはり王室の厳重な統制のもとにおかれていたことは、すでに述べたところから推測することができる。乳香産地からはなれているカネーが乳香の輸出港になっていることも、おそらくこのことと密接な関係があったと考えられる。おそらくハドゥラマウト王国の支配者は、乳香輸出の規制を厳重に行なうために、乳香産地の沿岸へは外来者の航行をできるだけ回避しようとして、ことさらにそこからはなれたカネーに外国船を入港させるようにしたのではなからうか。カネーより東方のサカリテース湾についての *Periplus* の作者の知識が、正確さを欠いているのも、このような事情があったからであろう。もっとも、*Periplus* にはインド方面から沿岸航海してくる船が、「晩い季節になると」モスカで冬を避け、「王の役人から綿布や麦や油の代りに乳香を船荷に受取って行く」と記されているから¹¹⁶⁾、乳香積みこみ港であるモスカへの外国船の入港が、必ずしも厳重に禁止されていたのではなからうが、このようなことはおそらく通常のできごとではなく、むしろ例外的なことだったのではなからうか。しかもその場合にも、入港した外国船は、役人の厳重な監視のもとにおかれていたことが、上述の記事から推測されるのである。なおこれらの船がどこの船であったかは明らかではないが、インド方面から「沿岸航海」してくると書かれているから、おそらくインドやムーザ、その他のアラビアの船であったろうと思われる。当時西方世界の船はインドへ往来するのに、オケーリスやラス・ファルタクから直接インド洋を横断する航路をとっていたから、インドからの帰途、ことさらに沿岸航海をしてきて、モスカで冬を過すというようなことは、やらなかったであろう。もっとも、インドからの出航

が取引などのために遅れることはあったかも知れない。西方世界の商船の場合、インドからの出航は通常12月から1月にかけて行なわれたから¹¹⁷⁾、かりにそのあとでインドを出発し、そのためインド洋上を吹く北東の季節風を利用できないで、沿岸航海を行なわなければならなかったとすれば、ハドゥラマウト沿岸に到着するのは、おそらく3月以降になるであろう。このような点から考えても、西方世界の船舶の場合、モスカで冬を避けるということは、考えられないように思われる。いずれにしても、乳香はハドゥラマウト王室の厳重な規制のもとに、輸出が行なわれていたと考えられる。

次に乳香とともにカネーの輸出品としてあげられているアロエは、ユリ科の *Aloe Perryi* からとった液汁を乾燥したもので、プリニウスはインド産のものがもっとも貴重であるが、アジアの属州にも産し、後者は傷口を癒すのにだけ用いられること、最上のアロエは脂肪質で、光沢があり、色は赤みがかっていて砕けやすいこと、アロエは薬剤として多方面に用いられるが、とくに下剤として効果があり、また胃を丈夫にすることなどを書いている¹¹⁸⁾。アロエは古代から重要な国際的商品で、シヨッフによれば、そのほとんどがソコトラ島産で、別の種類の *Aloe hepatica* がハドゥラマウトの溪谷やオーマン北部にまで産するが、この方はあまり需要されなかった。*Periplus* にソコトラ島の産物としてあげられていないのは、この島がハドゥラマウト王国に属していたので、そこからカネーに送られて輸出されたのであろうと、シヨッフは推測している。今日ソコトラ島ではアロエはあまり見られないが、かつてアロエが栽培されていた、壁で囲まれた畑が多数見られるという¹¹⁹⁾。

117) Plinius, *N. H.*, VI, xxvi, 106.

118) *Ibid.*, XXII, v, 14~16.

119) Schoff, p. 129. なお中国ではアロエを蘆薈というが、『諸蕃志』巻上の中理国の条に「山出=血碣・蘆薈」とあり、また巻下の蘆薈の条には「蘆薈出=大食奴菟国。草属也。其状如=蠶尾。土人採而以=玉器=搗=研之。熬而成=膏。置=諸皮袋中。」と記されている。中理国は中国の他の文献には見られないが、ソマリーランド沿岸を

116) *Periplus*, 32. 村川氏著, 100頁.

*Periplus*にはカネーの輸出品として、そのほかに「他の商業地から来た品々」があげられている。カネーは西北インドのバリユガザやスキュティアー Skythiā, それに後述するペルシア湾沿岸の取引地のオムマナ(オマナ)やオーマン北東部の沿岸に船を送って取引を行なっていたから¹²⁰⁾, これらの地方から輸入したものを再輸出していたのであろう。そのうちオーマン沿海の Masila 島に比定される Sarapis の島からは多量の優秀な亀を輸入していることが知られる。またオムマナはバリユガザやアラビアに真珠, パープル染料, そのほかさまざまなものを輸出することが記されているから¹²¹⁾, これらのものをカネーの商人は母港へ持ち帰り, 再輸出していたものと思われる。しかし, 西北インド方面からは, かれらがなにをもたらしただかは, *Periplus* の記事からは明らかではない。

次にディオスクーリデース島, すなわちソコトラ島では, 各種の亀を産することが, *Periplus* には記されており, これらはおそらく輸出の対象となったものと思われる。*Periplus*には真正の亀, 陸亀, 白亀, 山亀があげられているが, これらが今日のどの亀に相当するかは, 明らかではない。亀甲はさまざまな装身具などの製作に古くから使用され, 広く古代の文明世界ですこぶる珍重されたのであって, 紅海岸のアドゥーリヤアザニア沿岸から多量の亀甲が輸出されたことは, 第6章で述べたとおりである。亀のうち早くからもっとも珍重されたものはタイマイ(瑠璃)で, 熱帯の海洋に広く産する。この亀は性質が強暴で肉は食用に堪えないが, その甲羅は透明または黒・黄の2色をまじえ, 美しい光沢を放つ。しかも軽くて加工しやすいので, 櫛, 筭, その他の工芸品をつくる材料とし

て, 東アジアでも古代から盛んに用いられている。ショッフは上述の「真正の亀」はおそらくこのタイマイであろうと推測している¹²²⁾。もっとも *Periplus* には, この島では白亀をすこぶる多量に産し, それは「普通より大きな甲羅の故に優れて居る」と記されている。タイマイは大きさが1メートル足らずであるから, 上述の真正の亀がタイマイであるとすれば, 白亀はそれよりも大きな亀だったのであろう。また, 山亀については, *Periplus*にはすこぶる大型で, 甲羅も厚く, とくに腹に沿った部分は堅くて裁断できないが, 背中は切り刻んで「小箱や小札や小皿やその他此の種の容器」をつくるのに用いると記されている。ショッフはこれを青ウミガメ *Chelone mydas*, あるいは現在は大部分が滅んでしまったが, かつて西インド洋の多数の島々に生息していた Testudinidae 科の巨大な陸亀の一種ではなからうかと推測している¹²³⁾。いずれにせよ, ソコトラ島は各種の亀の産地として, インドやアラビアや西方世界の商人がここに定住し, また来航して, 亀甲の取引に従事していたものと思われる。

ソコトラ島の産物としては, *Periplus*にはさらにいわゆるインドのキンナバリがあげられ, これは「樹から涙のやうに滴るところを採集される」と記されている。キンナバリと呼ばれるものには鉱物と植物樹脂の2つがあり, 前者は水銀の硫化物である辰砂で, ラテン語では minium と呼ばれ, 赤色の絵具として用いられた。プリニウスは「インドのキンナバリ *cinnabaris* のかわりに, 名前の混同から minium が通常薬品に加えられていることを, わたくしは発見した」といい, これが有毒であることを指摘している¹²⁴⁾。*Periplus*に記されているものは, その記述から植物樹脂の方を指していることはいうまでもない。この方は薬品および着色剤として用いられる Dragon's blood (麒麟竭)

指し, ソコトラ島もこれに含まれていたと考えられている。また奴発国は既述のとおりゾファル地方を指していると考えられる。なお蘆薈とともに中理国の産物とされている血竭は, 後述のソコトラ産の Kinnabari である。(F. Hirth & W. W. Rockhill, *op. cit.*, pp. 131 & 225.)

120) *Periplus*, 27. 村川氏著, 96頁; Schoff, p. 32.

121) *Periplus*, 33 & 36. 村川氏著, 102-103頁; Schoff, pp. 35 & 36.

122) 護雅夫編『漢とローマ』, 平凡社『東西文明の交流』I, 昭和45年, 302頁; Schoff, pp. 136-37.

123) *Periplus*, 30. 村川氏著, 99頁; Schoff, p. 137.

124) *Periplus*, 30. 村川氏著, 99頁; Plinius, *N. H.*, XXIX, viii, 25.

である¹²⁵⁾。ワットによれば、「東インドの Dragon's blood」と呼ばれるものがあり、これは東部スマトラ、南部ボルネオ、およびペナンで見られる数種の Calamus (トウ) の実の苞の間から流れ出す樹脂で、そのほかその実を煮たり、幹に切りこみをつけても採取できる、しかし、真の Dragon's blood はソコトラ島に産するもので、これは数種の Dracaena という植物の幹に切りこみをつけて採取するという¹²⁶⁾。また Bent はこの木は幹が太くてねじれており、葉は内側にまくれた傘に似ていること、採取はごく簡単で、乾いた樹脂を木からたたき落して袋に詰めるだけであること、ソコトラ島からはいまはごくわずかしかな輸出されず、大部分はスマトラや南アメリカ産のものであること、などを述べている¹²⁷⁾。いずれにしても、キンナバリがソコトラ島に産したことは明らかであり、Periplus のころはこれも輸出の対象とされていたと考えるよからう。

以上、ハドゥラマウト王国の海上での輸出品について考察したが、この国の輸出品の最大のもは乳香であり、またソコトラ島産の亀甲も相当の量に上ったものと思われる。これらやそのほかの輸出品は、いずれも当時西方世界で需要されたものであるから、その多くが西方の商人の船で持ち帰られたものと考えられる。また乳香はペルシア湾沿岸のオムマナや西北インドのバルバリコン Barbarikon の輸入品の中にも見られるから、これらの地方へも乳香が送られていたことが知られる。しかし、乳香以外のものについては、果たしてペルシア湾やインド方面へ送られていたかどうか、明らかではないが、ソコトラ島産の亀甲はインド商人が扱っていたことは十分考えられる。またアエローやキンナバリもおそらくインド方面へ輸出されていたのではなかろうか。

125) Scoff, p. 137; 村川氏著, 171頁。

126) Sir George Watt, *The Commercial Products of India: Being an Abridgement of "The Dictionary of the Economic Products of India,"* reprint 1966, p. 202.

127) Bent, *Southern Arabia*, pp. 379, 381, & 387—Schoff, p. 138 による。

輸入品 次にハドゥラマウト王国の輸入品としては、カネーのところに記されているだけである。すなわち、次のとおりである。

ムーザと同様に少量の麦とブドウ酒、きわめて多量のありふれたのや本物のや不純なアラビア風の衣服、銅、錫、サンゴ、ステュラックス styrax, その他ムーザの輸入品と同じもの¹²⁸⁾。

これらの輸入品のうち、サンゴは西方世界の産物のうちで、東方世界で大いに愛好されたものの一つであった。『後漢書』西域伝は、大秦国に金銀奇宝が多いとして、その一つにサンゴをあげている¹²⁹⁾。プリニウスはちょうどインドの真珠を西方世界で珍重するように、インド人はサンゴを珍重するといひ、その産地としてガルリア湾の Stoechades 諸島、シシリー湾の Aeoliae 諸島と Drepana 附近、Graviscae とカムパニアの Neapolis 附近をあげて、これらのところで産するものももっとも価値あるものである、そのほか紅海産のものは色が黒く、ペルシア湾産のものは lace と呼ばれ、Erythrae 産のものは色は実に赤いけれども、軟かくて価値がないといっている。またインドの占いはサンゴを危険から守ってくれる強力な呪符であると考えており、したがってインド人は美しさと宗教的な力の2つの理由からサンゴを愛好すること、インド人がサンゴを愛好することが知られるまでは、ガルリア人は剣や楯や兜をサンゴで飾っていたが、いまはサンゴは大変すくなくなつて、産地でもなかなか見られないこと、などを書いている¹³⁰⁾。サンゴがインド方面へも輸出されたことは、Periplus の39, 49, 56節にも記されており、プリニウスの上述の記事を裏書きしてくれる。このことから、ショップはカネーに輸入されたサンゴは、アラビア船かインド船でインドへ再輸出されたものと推定してい

128) Periplus, 28. 村川氏著, 97頁。

129) 『後漢書』卷八十八, 西域伝, 大秦国の条に「土多金銀奇宝。有夜光璧・明月珠……珊瑚……」。……凡外国諸珍異皆出焉。」と記されている。

130) Plinius, *N. H.*, XXXII, xi, 22~24.

る¹³¹⁾。

次にステュラックス(英語の storax)については、プリニウスはフェニキアのかなたのユダヤに近いシリアに産し、その樹はマルメロに似ており、その樹脂は快適で刺激性の匂いを発すること、シリア産に次ぐものは、*Pisidia*, *Cilicia* などの小アジア南部やキプロス島に産し、シリアの *Amanus* 山のものは薬用として用いられるが、それ以上に香料として用いられ、杉の樹脂を混ぜたり、蜂蜜や苦いアーモンドの実を混ぜて用いること、などを書いている。また別のところでは、薬剤として咳どめに用いられ、また咽喉部や胸部の疾患、そのほかさまざまな病気に効果があることを記している¹³²⁾。しかしショッフは、ステュラックスはローマ時代には *Styracaceae* 科の *styrax officinalis* および *Hamamelidaceae* 科の *Liquidambar orientalis* という2つの異なったものを指していっており、前者は固形で香料として用いられ、後者は液状で小アジアの南西部に産し、去痰剤や興奮剤として用いられ、また慢性気管支炎に効果があり、*Flückiger* および *Hanbury* の *Pharmacographia* に、これが早くから中国にまで輸出されていたことが記されているので、これに従って、カネーで輸入されるステュラックスはインドおよび中国へ再輸出するための液状のものであったろうと推定している¹³³⁾。またヒルトは中国の古文獻に出てくる蘇合をステュラックスであるとしているが、蘇合はさまざまな香料を混ぜあわせ、その汁を煎じてつくることが『後漢書』に記されている¹³⁴⁾。ステュラックスについて

は、このようにさまざまなことがいわれており、その実態はなかなかわからないが、これがシリアや小アジア南部などに産する一種の樹脂香料であり、プリニウスはこれにさまざまなものを混ぜるといい、『後漢書』にはさまざまな香料の液汁を混ぜあわせてつくると記されているから、単に一種類の樹液からなっているものではないように思われる。

ところで前述のカネーの輸入品を見ると、ムーザの輸入品に類するものが多く目につく。すなわち、小麦とブドウ酒が共通しているほか、「その他ムーザの輸入品と同じ物」という記述もされている。またさまざまなアラビア風の衣服は、ムーザで輸入されたものとは表現が異なっているが、同じようなものが多かったのではなかろうか。しかし、銅や錫はムーザの輸入品の中には見られない。またサンゴやステュラックスも同様である。しかし、これらの輸入品は、おそらくすべてが西方世界からもたらされたものであり、とくに多量の衣服類は、エジプト産のものであったと考えてよかろう。ただムーザの輸入品に見られる貨幣が欠けているのは、どうしたことであろうか。カネーからは大量の乳香が西方世界に輸出されていたことは、すでに述べたところから疑いがなく、没薬の輸出港であるムーザと同様に、おそらく相当に輸出超過であったと考えられるが、貨幣が輸入品の中に記されていないのは、あるいは書写の際に脱落したのであろうか。またサンゴやステュラックスについて、ショッフはこれらがインド方面へ再輸出されたのではないかと推定しているが、ハドゥラマウトの国内で消費されたものもあったと考えても、さしつかえないであろう。この王国は乳香の輸出国として、当時は相当に豊かで繁栄していたと推測されるからである。いずれにしても、この王国はヒムヤル王国に隣接する南アラビアの一国として、両者の間に生産物

131) Schoff, p. 128.

132) Plinius, *N. H.*, XII, lv, 124~125; XXIX, xv, 24.

133) Schoff, p. 128.

134) F. Hirth, *China and the Roman Orient*, 1885 (中華民国28年影印), p. 263. 『後漢書』卷八十八, 西域伝, 大秦国の条に、この国の物産の一つとしてこれがあげられており、「合=会諸香-。煎=其汁-以爲=蘇合-。」と記されている。このほか中国の文獻には蘇合香または蘇合香油の名前でしばしば記されている。たとえば、『諸蕃志』卷下には「蘇合香油出=大食国-。氣味大抵類=篤耨-。以=濃而無=滓為=上。蕃人多用=以塗=身。云々」と記されている。馮承均はその訳注の中で「今蘇合香油乃 storax 油。産於小亞細亞之 *Liquidambar orientalis* 中。古代中国所識之蘇合。出大秦国。案希臘語名此物曰 sturaz。」

漢名蘇合殆其對音。蓋西利亞 *styrax officinalis* 之産物也。」と書いている。(馮承均『諸蕃志校注』, 台湾商務院書館, 中華民國56年, 102-103頁。なお Hirth and Rockhill, *op. cit.*, pp. 200-201 参照。

の差異はあれ、生活様式や文化の程度に、それほど大きな差異はなかったであろう。そのように考えれば、ムーザとカネーの輸入品に、相違よりは共通するものが多いのは当然とってよからう。

以上、ハドゥラマウト王国沿岸およびその支配下にあったソコトラ島の状況について考察したが、この国は当時は乳香産地として知られており、カネーがその輸出港として、西方世界の商人の来航する取引地であった。かれらはこの地方向けの衣服を大量に船に積み、そのほかサンゴやステュラックス、小麦やブドウ酒、その他の西方産の商品を積んで、カネーに来航し、この地方の特産物である乳香を求めて帰っていったのである。しかし、乳香の実際の産地はそれより東方のゾファル地方にあり、ハドゥラマウトの支配者は、外来の商人が乳香産地におもむくことを好まなかったらしく、産地からカネーまでは住民の手で乳香の輸送が行なわれていた。そのため乳香産地に位置しているモスカには、西方世界の船舶の来航がようやくいちじるしくなってきた紀元前1世紀の末ごろ、乳香積込みのための施設が設けられるようになったと推測され、おそらくこのころを境として、乳香貿易は陸路による隊商輸送から海上輸送へと転換が行なわれたものと考えられる。またこの国の土着の住民も、西北インドやペルシア湾沿岸へおもむいて取引に従事しており、インドの商人もソコトラ島ばかりでなく、カネーへも来航したことであろう。こうしてハドゥラマウト王国沿岸の海上貿易は、当時は相当活発に行なわれていたことが推測されるのである。

オーマン北東部・ペルシア湾沿岸

沿岸の状況 *Periplus* にはモスカからさきのアラビア沿岸の記述も見られる。まずモスカから1,500スタディオンのところにアシコーン *Asichōn* という地名をあげ、そこまでは陸地に沿って山が延びていること、この山の尽きる部分の海中にゼーノビオス *Zēnobios* と呼ばれる7つの島々が横たわっていること、次いで未開の

地方が続くが、ここはもはや同じ王国、すなわちハドゥラマウト王国ではなく、ペルシス *Persis* に属していること、ここに沿って沖の方を航海してゆくと、ゼーノビオスの島々から約2,000スタディオンのサラピス *Sarapis* の島があることが記され、さらにその次の湾に沿って真北に進むと、ペルシア湾の入口に、カライウー *Kalaiū* 諸島があると記されている¹³⁵⁾。

以上は今日のオーマン土侯国のモスカから東方の沿岸を、ペルシア湾の入口近くまで述べた部分である。まず最初のアシコーンは、今日の *Ras Hasik* (17°23' N., 55°20' E.) に比定され、またここまで延びている山は、*Jebel Samhan* に比定されている¹³⁶⁾。次のゼーノビオスと呼ばれる7つの島は、*Kuria Muria* 諸島 (17°20' N., 56°E. あたり) に比定されているが、ゼーノビオスという名称は、この附近の沿岸を占拠していたアラビア人の *Beni Genāb* (*Zenāb*) 部族の名前が、ギリシア語化されたものと考えられる¹³⁷⁾。

Periplus によれば、ゼーノビオス諸島までがハドゥラマウト王国の領域で、そのさきはペルシス、すなわちペルシアに属しているとされているから、当時はペルシアを支配していたパルティアが、対岸のアラビア側まで支配の手を伸ばしていたことがうかがわれる。そして *Periplus* にはここから沖あいを航海してサラピスの島に達すると記されているが、ショッフはローマと戦っているパルティア帝国がこの沿岸を征服したので、*Periplus* の作者は沿岸に近よることができなかつたのでであろうと推定し、そのためこの附近の記述は伝聞によって簡単に記されたものであろうと述べている。また村川堅太郎氏はこのあたりからペルシア湾沿岸やイランのカルマニア、ゲドロシア沿岸は、インド航海者の立ちよる必要のないところで、そのため *Periplus* の作者はまた聞きで書いたものと推定し、

135) *Periplus*, 33-34. 村川氏著, 101-102頁; Schoff, pp. 33-34.

136) Schoff, p. 146; 村川氏著, 173頁.

137) Schoff, p. 144; 村川氏著, 173頁.

その記述が不正確であるとされている¹³⁸⁾。いずれにしても、沖あいを航行してサラピスにおもむくという *Periplus* の記述は、この附近では沿岸からある程度はなれて航海が行なわれたことを物語ってくれる。次にサラピスの島については、この島が陸地から 120 スタディオンはなれており、多量の優秀な亀を産するので、通常カネーからボートや舢舨が送られることが、*Periplus* には記されているから、カネーの商人が亀甲を求めてこの方面へ進出していたことがうかがわれる。この島はこの海域で最大の島である Masila 島 (20°20' N., 58°40' E.) に比定されている¹³⁹⁾。次のカライウー諸島については、*Periplus* にペルシア海、すなわちペルシア湾の入口に、ほとんど 2,000 スタディオンにわたって陸地に沿って延びている島々と記されているが、これはオーマン土侯国の首府マスカット (23°48' N., 58°0' E.) の前面に横たわる Fahal 島およびその北西にある Daimaniyat 諸島 (23°50' N., 58°E. あたり) あたりをさすものと考えられている。カライウーという古名はマスカットの南の Kalhat に関連があるとされている。またこのカルハットはこの地方の取引地でかつインドへ向かう出発地とプリニウスがいつている Acila に相当するものとされている¹⁴⁰⁾。

Periplus の作者は続いてペルシア湾の入口附近についての叙述に移り、この附近には真珠貝の採取場が非常にたくさんあり、また湾の入口の航行が約 600 スタディオンあることなどを記している¹⁴¹⁾。ペルシア湾の真珠採取は古来有

名で、後述するように西方世界で珍重されたことが知られている。また湾の入口の距離については、ストラボンやアルリアノスは実際にこの海峡を通ったネアルコスによって、約 1 日航程としているから、*Periplus* のあげている距離はこれとそれほど大きな差異はない¹⁴²⁾。

Periplus には続いて、湾の入口からすこぶる大きくて幅の広いペルシア湾が奥深く入りこんでおり、その一番奥のところにアポログー Apologū という「法定の商業地」があり、「パシヌー・カラックス Pasinū Charax とエウプラテース川のところに位して居る」と記されている¹⁴³⁾。アポログーの名は他の古典には見えず、この商業地がいつごろ設けられたかも明らかではないが、中世のアラビア地理書に見える Ubullah に当たるものとされており、アポログーはこのウブッラーがなまったものと考えられている。ショッフによれば、ウブッラーはすでにバビロニアやアッシリアの記録にも「Bit-Yakin の国の Ubulu」という名で見えているという¹⁴⁴⁾。もっともペルシア湾の奥地には、新バビロニアのころから Teredon という港があり、これが主要な港として栄えたのであるが、*Periplus* の書かれたころは、ウブッラー、すなわちアポログーが法定の商業地として栄えていたわけである。その後ウブッラーはイスラム時代にいたるまで繁栄したようで、10世紀にはここが相当に大きな町であったらししく、Muḩaddasi はここの金曜日のモスクが見事な建造物であることを記し、その半世紀後の Nāsir-i-Khusraw はここの宮殿、市場、およびモスクの

138) Schoff, p. 147; 村川氏著, 174頁。

139) *Periplus*, 33. 村川氏著, 101-102頁および174頁; Schoff, pp. 35 & 146. なおサラピスはヘレニズム時代からローマ帝国時代にかけて、エジプトを中心に広く地中海地方で信仰された神の名前で、とくにローマ帝国時代には東方世界と商業関係を持った諸都市で、サラピス神と Isis 神の両者の信仰が盛んであった。(The Oxford Classical Dictionary, p. 793, s. v. Sarapis.) この点でサラピスの名で呼ばれる島が、アラビア海に記されていることは、興味深いものがある。また村川氏はサラピスがとくに海路安全の神として船乗り信仰されていたことを指摘されている。(村川氏著, 174頁。)

140) *Periplus*, 34. 村川氏著, 102頁および175頁; Schoff, pp. 35-36 & 147; Plinius, N. H., VI, xxxii, 151.

141) *Periplus*, 35. 村川氏著, 102-103頁; Schoff, p. 36.

142) ストラボンはネアルコスを引いて、ペルシア湾の入口が 1 日航程以上ではないといっている。(Strabon, XV, 2, 14) またアルリアノスはネアルコスの艦隊がイラン側の沿岸ぞいに湾の入口にさしかかった時、長い岬が大洋に突き出ているのを見、そこまでは 1 日航程と思われたことを書いている。(Arrianos, *Indika*, VIII, xxxii.)

143) *Periplus*, 35. 村川氏著, 103頁。

144) たとえば Tiglath-Pileser 3 世 (前745~727) のニムルードの碑文には、王が Bit-Yakin から下の海 (ペルシア湾) の沿岸を Uknu 川にいたるまで征服して、海の王 Yakin の Merodach-Baladan から、黄金、宝石、木材、衣服、あらゆる種類の香料等々を得たことが記されている。(Schoff, p. 149.)

すばらしいことを伝えている。しかし、ここは瘴癘の地であったため、その奥地に設けられたバスラに貿易港としての位置を奪われてしまい、13世紀の Kazwini はここが荒廃していることを伝えている¹⁴⁵⁾。『新唐書』に記された烏刺国はこのウブッラーに比定されている¹⁴⁶⁾。いずれにしても、アポログーはペルシア湾の奥地の貿易港として、すくなくとも紀元1世紀からイスラム時代の初期まで使用されていたことがうかがわれる。Periplusには後述のオムマナ港に関する記事の中に、「このペルシス地方の両商業地に向けて」バリユガザから大型の船が送られること、および両商業地からバリユガザやアラビア方面へ真珠、その他が輸出されることが記されており¹⁴⁷⁾、この両商業地のうちの一つはアポログーと解されるから、アポログーは当時西北インドや南アラビア方面と貿易関係があったことが推測される。また当時はこの地方はパルティア帝国の支配下にあったわけであるが、ここが法定の商業地とされているから、おそらくここにはパルティアの官憲が駐在し、徴税や

警備の任に当たっていたものと考えられる。

次のパシヌー・カラックスについては、プリニウスに詳細な記載があり、またここが白鳥庫吉博士によって『後漢書』卷八十八の西域伝に記された條支国に比定されたことは、すでに第5章の末尾で述べたとおりである¹⁴⁸⁾。したがってここではくり返さないが、若干補足すれば、プリニウスはここがはじめは沿岸から1.25マイルのところにあつたが、いまはティグリスおよびエウフラテス両河の運ぶ土砂の沈澱によって120マイルも奥地になっていることを記したあとで、このことはアラブの使節やそこからやってくるわれわれの商人が、そのようにいっていると書いている。この記事から、この方面で西方世界の商人が活動していたことがうかがわれる。また『後漢書』西域伝には、安息(パルティア)が「後役=属條支=。為置=大将監領諸小城=焉。」と記されているから、條支が白鳥博士の比定したようにカラックスであれば、ここにもパルティアは官憲を派遣して、徴税や警備をさせていたものと考えられる¹⁴⁹⁾。カラックスはエウフラテス川とティグリス川が合流したシャト・エル・アラブ川にイラン方面からカルーン川が流れこむ地点、すなわち今日のホッラムシャハル(30°26' N., 48°11' E.) に比定されているが、ここは Periplus によればアポログーとごく近い距離にあるから、パルティアがこの両者で同時に貿易品に対する徴税を行なったというのは、不合理のようにも思われる。そうだとすれば、『後漢書』の記事は両者を混同して書かれたものか、あるいは徴税地がアポログーからのちにカラックスに移されたのかも知れない。もっとも條支国の位置については異論があり、ヒルトはヒーラに近い Nedjef に、藤田豊八博士はペルシア湾のイラン側のブシール港に近い Taokē に、また宮崎市定博士はシリアのオロンテス河口のセレウキアに比定されていることは、すでに第5章で述べたとおりである。

145) G. Le Strange, *The Land of the Eastern Caliphate*, 1905 [reprint 1966], p. 47.

146) 『新唐書』卷四十三下の地理志に次の記述がある。「又自提颯国西二十日行。経小国二十餘。至提羅盧和国。一曰羅和異国。国人於海中立華表。夜則置炬其上。使舶人夜行不迷。又西一日行。至烏刺国。乃大食国之弗利刺河。南入干海。小舟泝流二日。至末羅国。大食重鎮也。」桑原隲蔵博士によれば、提颯国はインドス河口のやや西方にある、アラビア人の Daybul, また、提羅盧和国はアバダン附近にあった Djerrarah で、10世紀中葉の Mas'ūdi がここに3つの木造の棧架を組みあわせた燈台のあったことを記していることを指摘されている。また弗利刺河はエウフラテス川、末羅国はバスラに比定されるとされている。(桑原氏「波斯湾の東洋貿易港に就て」『史林』1巻3号, 同氏著『東西交通史論叢』, 弘文堂書店, 昭和19年, 360-394頁。) これによれば、ウブッラーはアバダンから西へ1日行程、エウフラテス川(実際はエウフラテス川とティグリス川の合流したあとのシャト・エル・アラブ川)がペルシア湾に注ぐ河口近くであり、バスラはウブッラーから川を2日さかのぼったところとなるが、バスラまで2日というのは、いささか長すぎるようである。なお桑原博士はこの論文の中で、『後漢書』西域伝の安息国の条に見える于羅国もウブッラーを指しているとされているが、これにはなお若干の疑問があり、再検討を要している。しかし、一般に于羅国はエウフラテス川をもっとさかのぼったところにある Hirah に比定されている。

147) Periplus, 36. 村川氏著, 103頁; Schoff, p. 36.

148) 本稿(2), 83頁および85頁参照。

149) Plinius, *N. H.*, VI, xxxi, 139~140; 『後漢書』卷八十八, 西域伝, 條支国の条。

*Periplus*にはさらにペルシア「湾の口を沿岸航行すること6日航程の後」のところに、オムマナ Ommana またはオマナ Omana と呼ばれる、「ペルシスの別の商業地」があることが記されている¹⁵⁰⁾。オムマナはハドゥラマウト王国にもオマナ湾があげられており、今日のオーマンという地名と関連があると考えられることは、すでに述べたとおりである。ところでここにいう「ペルシスの別の」とは、上述のアポロゲーとは別のペルシアの商業地という意味に解され、この商業地も当時パルティアに属していたことがうかがわれる。このオムマナの位置については、学者の間にさまざまな見解がある。すなわち、「湾の口を沿岸航行する」という文章のとり方しだいで、これをペルシア湾内に入って航行するともとれるし、湾の外を航行するともとれる。あるいはまた沿岸航行にしても、これをイラン側とアラビア側のいずれにも解することができる。たとえば、ミュラー、ファブリキウス、およびマックリンドルは、これを海峡から6日航程東方へ航海すると解して、オムマナをイラン側のマクラン沿岸のChabar湾(25°15' N., 60°30' E.)あたりに求めている¹⁵¹⁾。ところでプリニウスはペルシア湾のアラビア側の記述の中で、Cynos川(Wadi ed-Dawāsir?)のかなたについて、「ユバJubaによれば、かの側(アラビア側を指す—引用者)のかなたの航海は、岩のために探検されていない」と述べて、Omaniの町、「これまでの作者たちがカルマニアの有名な港であるといっている」Omanaの町、「今日ペルシア湾内のもっともよく行く港とわれわれの商人が知っている」Homna およびAttanaの町を、ユバが落としていと書いている¹⁵²⁾。この記事はペルシア湾内にも西方世界の商人が進出してたことをうかがわせるが、ショッフはプリニウスのこの記事に着目して、オムマナはペルシア湾内のアラビア側に求めるべきであるとして、「湾の口を沿岸航行する」という部分を “sai-

ling through the mouth of the Gulf”と訳し、その正確な位置は定かではないが、Abu Dhabi (24°30' N., 54°21' E.) と Khor ed-Duan (24°17' N., 51°27' E.) の間のどこかであろうが、湾の入口から6日航程、すなわち3,000スタディオンということから考えれば、Abu Thanni または Subakaha (24°N., 51°45' E.) あたりであろうと推定している。村川堅太郎氏も湾内のアラビア側に求められるべきであると考え、北緯52°あたりのSubakahaからKhor ed-Duanのあたりが、もっとも当てはまるとされている¹⁵³⁾。

オムマナはアポロゲーと同様に、バリユガザから大型の船が送られてくるほか、カネー、その他のアラビア方面とも取引があり、オムマナからアラビアに向けて「マダラテ madarate と呼ばれる、此の土地特有の縫ひ合せて造った小舟」が送られることが、*Periplus*に記されている¹⁵⁴⁾。グラザーによれば、madarateはアラビア語の muddara'at あるいは madara'at で、「ヤシの繊維でしばった」という意味である。アラビア地方は鉄が乏しいため、アラビア人は後世にいたるまで船に釘を使用せず、ヤシの繊維でしばった船が使用されているが、マダラテはそのような船が古くからアラビア人の間で使用されていたことを示すものといっておく¹⁵⁵⁾。以上に述べたところから、オムマナはアポロゲーとともに、当時はインドや南アラビア方面と取引のある、ペルシア湾の重要な貿易港であったということができよう。

*Periplus*にはオムマナ地方の次に、「別の王国に属するパルシダイ Parsidai の地方と所謂テラブドーン Terabdōn 湾」が横たわり、その真中に岬が突き出ていること、この湾には一つの川があり、船をいれることができ、河口にはオーライア Ōraia という小さな商業地があること、また川の背後には海から7日行程のところにラムバキア Rhambakia という内地の市が

150) *Periplus*, 36. 村川氏著, 103頁.

151) Schoff, p. 151 による.

152) Plinius, *N. H.*, VI, xxxii, 149.

153) Schoff, pp. 36 & 150; 村川氏著, 180-81頁.

154) *Periplus*, 36. 村川氏著, 103頁.

155) Schoff, p. 154; 村川氏著, 183頁. なお本稿(1) 49頁参照.

あり、そこには王宮があること、が記されている¹⁵⁶⁾。

上述のバルシダイ地方は、アケメネス朝の発祥の地であるイラン高原の南部地方を指しているものようで、いわゆるペルシア・プロパーに相当し、またカルマニア地方も含まれていると考えられる。当時はこの地方はパルティアの属国となっていたらしく、ストラボンは「ペルシア人はいまは再び自分たちの国に組織されたが、その王は他の王に服属している。以前はマケドニア人の王に、いまはパルティア人の王に」と書いている¹⁵⁷⁾。 *Periplus* にこの地方が「別の王国」に属していると記されているのは、こうした事情を述べたものであろう¹⁵⁸⁾。またテレブドーンは他の古典には見えないが、ショッフはこれを Γεδρωσίον と改めて、ゲドロシアの湾と訳し、Ras Nuh (25°7' N., 62°18' E.) と Cape Monze (24°45' N., 66°40' E.) との間のパキスタンの沿岸地帯に比定し、その真中に突き出ている岬を Ras Ormara (25°6' N., 64°36' E.) に比定している¹⁵⁹⁾。

次に河口にある小さな商業地オーライアは、アルリアノスの『アレクサンドロス大王遠征記』や『インド誌』に出てくる Ōreitai に関係があるものと考えられている。アルリアノスは『遠征記』の中で、アレクサンドロス大王がインダス河口の Pattala を発して、インドから帰還する途中、Arabis 川を渡ったのち、抵抗するオーレイタイと戦ってこれを破ったことを記し、また『インド誌』では、上述のアラビス川を境にして、東にインド人の Arabies が、西にオーレイタイが住んでいると書いている¹⁶⁰⁾。このアラビス川が *Periplus* に述べられたオーライアのところで湾に注ぐ川に相当するものと考えられ、この川は通常 Purali 川に比定され、またこの川の注ぐ湾は Sonmiani 湾 (25°0' N., 66°

15' E.) であろうとされている。しかし、プラリ川は *Periplus* のころは、現在よりももっと奥地で湾に注いでいたらしく、当時の海岸線はいまは泥土で埋まってしまったようであり、オーライアの位置は定かではない¹⁶¹⁾。

ラムバキアについては、アルリアノスはアレクサンドロス大王がオーレイタイと戦ったのち、オーレイタイの最大の村である Rambakia に到着し、ここへ都市を建設すれば、大いに有望であろうと考えて、Hephaistion をあとに残したことを記している。またディオドロスは大王がオーレイタイを征服したのち、そこへアレクサンドリアを設けたことを書いている¹⁶²⁾。この2つの記事と *Periplus* の記事とを考えあわせれば、ディオドロスの述べているアレクサンドリアがラムバキアに当るものと思われる。ショッフはこれを今日の Las Bela (26°26' N., 66°20' E.) の附近であろうと推定している。この地方にはアラビア人の古い占拠の跡が多いというが、しかし、ラムバキアの正確な位置は明らかではない¹⁶³⁾。

輸出品 次に以上の地域の貿易品や産物について、*Periplus* の記述を見ると、まずオーマン沿海のマシーラ島に比定されるサラピス島には、すでに述べたように、かなり多数の優秀な亀を産し、カネーの人々がこれらを求めにくることが記されているほか、オムマナとアポログーの両商業地に輸出入品の記載があり、またバルシダイ地方に産物の記載がある。まず輸出品および産物については、次のものがあげられている。

両商業地——多量であるが、インドのよりは劣等な真珠、パープル染料、この土地特有の衣服、ブドウ酒、多量のナツメヤシ、金、奴隸
 パルシダイ地方——多量の麦、ブドウ酒、米、ナツメヤシ、(海岸地方に) ブデルラ Budella¹⁶⁴⁾

156) *Periplus*, 37. 村川氏著, 104頁; Schoff, pp. 36-37.

157) Strabon, XV, 3, 24.

158) Schoff, p. 161; 村川氏著, 185頁.

159) Schoff, p. 161; 村川氏著, 185頁.

160) Arrianos, *Anabasis of Alexander*, VI, xxi; ditto, *Indika*, VIII, xxi.

161) Schoff, p. 161; 村川氏著, 185-86頁.

162) Arrianos, *Anabasis*, VI, xxi; Diodoros, XVII, 104.

163) Schoff, p. 163; 村川氏著, 186頁.

164) *Periplus*, 36 & 37. 村川氏著, 103-104頁. 両商業地のは「輸入される」と書かれているが、これは明らかに「輸出される」の誤記であると考えられる。

以上のうち、まず真珠については、ペルシア湾の入口附近にたくさん真珠貝の採取場のあることが、*Periplus* に記されていることは、すでに述べたとおりであるが、ペルシア湾内のバハライン諸島の Samak 島に比定される Tyros 島も「たくさんの真珠ですこぶる有名」なことを、プリニウスは記している¹⁶⁵⁾。かれはまた別のところで、真珠は主としてインド洋から送られてくるが、セイロンでもっともたくさんとれること、しかし、とくに優秀なのはペルシア湾のアラビアの周辺のものであること、真珠の価値は輝き、大きさ、丸さ、なめらかさ、および重さにあるが、ペルシア湾のものは輝きにおいて優れ、インド洋のものは雲母の薄片に似ていて大きいこと、婦人はこれらの真珠を指にかけたり、片方のイヤリングだけに2~3個を使って誇りとし、貧しい人々でさえ真珠をほしがり、さらに足に飾ったり、サンダルの紐やスリッパのいたるところにつけたりさえすることなどを記し、さらにガイウス夫人となった Lollia Paulina が、厳粛な儀式ではなく、普通の結婚式の祝宴に出席するのに、頭、髪、耳、首、および指のいたるところに、エメラルドと真珠を交互につけて、きらきらと光り輝いて見えたが、その値は実に4千万セステルセースにもおよんだこと、そのほかさまざまな豪華な装いの例をあげている¹⁶⁶⁾。このように、真珠は西方世界で婦人の装身具としてすこぶる珍重されたが、これは東洋でも同様であった。*Periplus* にはペルシア湾の真珠がインドのよりも劣等であると記されているが、プリニウスはペルシア湾産のものがとくに優秀であるとしており、このことは遠く中国においても知られていたことが、後世の文献ではあるが、『諸蕃志』の記事などからうかがわれる¹⁶⁷⁾。

165) Plinius, *N. H.*, VI, xxxii, 148. ストラボンもネアルコスを引いて、ペルシア湾の入口に近い島に、多量の貴重な真珠を産することを書いている。(Strabon, XVI, 3, 7.)

166) Plinius, *N. H.*, IX, liv, 106; lvi, 112-114; lviii, 117.

167) 『諸蕃志』巻下には「真珠出大食国之道上。又出西難・監籠二国。広西湖北亦有之。但不若大食・監籠」

ナツメヤシは温暖な乾燥地帯に生育しており、その範囲はセネガルからインダス川流域にいたる北緯15°から20°までの広範な地域におよんでいる。とくにメソポタミア、シリア、エジプト、アラビア半島の縁辺地帯では、古代から盛んに栽培され、その果実はこの地方の重要な食品の一つとなってきたばかりでなく、その果汁からは酒がつくられ、幹は木材として用いられ、またその繊維も利用されるというように、この地方ではきわめて有用な植物であり、この点は現在もかわりはない。ショッフは上述の輸出品中に見えるブドウ酒も、ナツメヤシの実からつくった酒であろうと推定している¹⁶⁸⁾。

金については、貨幣や金製品ではない、単なる黄金の輸出は、*Periplus* にはここに記されているだけである。アラビアの金は古来から有名であったらしく、たとえばディオドロスはアラビアに *ἄπρος* (「火を通さない」という意味) という金を産することを述べ、それは鉱石から精錬するのではなく、直接地中から掘り出すもので、栗の実ほどの大きさの塊状をなしており、色は火のように赤く、もっとも貴重な宝石をはめこむ台として用いられると書いている¹⁶⁹⁾。金は東アラビアの重要な産物で、Wadi er-Rumma, Wadi Yabrin, Wadi ed-Dawasir など、所々に産し、最後の Wadi ed-Dawasir はオムマナ港の位置に推定される東経52°のあたりでペルシア湾に注いでいる¹⁷⁰⁾。また奴隷はアフリカ沿岸のオポーネーの輸出品の中に見られたが、ここでも現われてくる。オーマン沿岸の諸港は後世になっても奴隷市場として知られていたが、

籠之明浄耳。云々」と記されている。西難はセイロン島、監籠はスマトラ島の北西隅の地方を指している。

168) Schoff, p. 157; 村川氏著, 184頁。

169) Diodoros, II, 50. ストラボンもアルテミドロスの引用の中で、アラビアの Debae 族の地方では、金が砂金ではなく、金塊の形で掘り出され、その大きさはもっとも小さなもので果実の核、中ぐらいのものはカリンの実、大きなものはクルミの実ぐらいあること、土人はこれに穴をあけ、透明な石と交互に紐に通して、首や手首に巻くが、近隣の人々と安い値段で交換もすること、その値は同量の真鍮の3倍、銀の2倍であること、などを書いている。(Strabon, XVI, 4, 18.)

170) Schoff, p. 160; 村川氏著, 184頁。

その伝統は *Periplus* の時代までさかのぼることが推測されるわけである¹⁷¹⁾。

次にパルシダイ地方の沿岸地帯の産物としてあげられているブデルラは、*Balsamodendron mukul*, *B. pubescens*, *B. Roxburghii* (*Amyris comiphora*, Roxb.) から生じる芳香樹脂で、*Periplus* にはパルシダイの沿岸地帯でできるのは、これだけであると記されているが、これは没薬および乳香に類するもので、通常偽没薬と訳されている。サンスクリット語では *gúggul* といい、インドでは早くから香料および薬剤として用いられていた¹⁷²⁾。アレクサンドロス大王がインドから帰還の途中、オーレイタイ人の地方を通過してゲドロシアの砂漠へ出た時、通常の没薬樹よりもずっと背の高い没薬樹が生えているのを見て、従軍していたフェニキアの商人たちが、これらの木から樹脂を大量に採取したことを、アリストプロスは伝えているが¹⁷³⁾、これはブデルラのことを指していると考えられる。またプリニウスはインドに接するバクトリア地方に *bdellium* (ブデルラ) を産し、これはまたアラビア、インド、メディア、およびバビロンにも産すること、それは蠟のように透明で、匂いがあり、味は酸味もあるが苦いこと、宗教儀礼に用いる時は、ブドウ酒に漬けるが、そうすると匂いがいっそう強くなること、などを書いている¹⁷⁴⁾。

ペルシア湾の両商業地、すなわちオムマナおよびアポロギーには、西北インドのバリュガザから船が送られ、またオムマナとカネー、その他のアラビアとの間にも船の往来のあったことが、*Periplus* には記されているので¹⁷⁵⁾、以上にあげた両商業地の輸出品は、インドや南アラビア方面に送られたものと考えることができる。

これらの輸出品の中には、以上に述べたところから明らかなように、その多くは土産のものであったろうが、パープル染料はおそらくシリア方面から陸路もたらされたものが、再輸出されたのであろう。

パルシダイ地方の産物は、果たして輸出の対象とされたかどうか、明らかではないが、ここにはオーライアという小さな商業地があげられているから、やはり輸出されたものもあつたであろう。すくなくともブデルラはそう考えられる。また *Periplus* の作者が、後述するように、インドまたはアラビアの商人か船乗からの伝聞によって、この部分を書いたとすれば、その他の産物も輸出されていたと考える方が自然のように思われる。

輸入品 次に輸入品としては、ペルシア湾の両商業地について、次のものがあげられている。

銅、白檀材、材木と角、ゴマの木、黒檀、乳香

以上のうち、乳香はカネーから送られると明記されており、その他のものはバリュガザから大型の船で送られると記されている¹⁷⁶⁾。

これらの品々のうち、白檀材は矮性の常緑樹で、南インドの乾燥地帯に自生し、また北インドでは古代から栽培されており、香りが高く、焼いて燻香として用いられ、またその木片や木屑からは香油がえられる。ローマの文献でこれに言及しているのは、*Periplus* だけであるという¹⁷⁷⁾。また黒檀は西方世界ではすでに古代エジプトのころから、ソマリーランドおよびエチオピア産のものが知られている。インド以東では、主として南インド、セイロン、ビルマ、および東部ベンガルに産する¹⁷⁸⁾。したがって、南インド方面からバリュガザへ送られたものが、再輸出されたものと考えられる。銅はかつて南インド、ラージプタナ、ヒマラヤ周辺の諸方で相当に生産されたというが、近年にいたるまで

171) Schoff, p. 161.

172) 山田憲太郎氏著『東西香薬史』、福村書店、1957年、142-43頁。

173) Arrianos, *Anabasis*, VI, xxii.

174) Plinius, *N. H.*, XII, xix, 35.

175) *Periplus*, 36. 村川氏著、103頁；Schoff, p. 36. なおここにいうアラビアは、ペルシスすなわちパルティア領以外の南アラビア地方を指しているものと考えられる。(村川氏著、183頁。)

176) *Periplus*, 36. 村川氏著、103頁；Schoff, p. 36.

177) Schoff, p. 152；村川氏著、181頁。

178) Schoff, p. 153；村川氏著、182-83頁；Watt, *op. cit.*, p. 498.

銅の精錬はインドではあまり行なわれなかったようである。それでショッフは、西方からカネーに送られた銅が、バリュガザを経てペルシア湾方面へ送られた可能性があるとして推測している¹⁷⁹⁾。

次に材木と角 *δοκῶν καὶ κερατῶν* については、ミュラーはこれを *δοκῶν καὶ κορμῶν* (あるいは *κορμίωv*) (丸太と樹幹) と推定し、またファブリキウスは *δοκῶν κερατεανῶν* と読み、*κερατεανός* はドイツ語の *Johannisbrotbaum* (イナゴマメの木) について使われる形容詞であり、これによって作者はチーク材を意味したものと推定している。ショッフはこれに従ってこれを *timbers of teakwood* と訳している¹⁸⁰⁾。チークはインドやビルマに多量に産し、その木材は建築用材として重要な位置を占めている。最後にゴマの木は *φαλάγγων σασαμίνων* と書かれているが、これは *φ. σησαμίνων*, すなわち「ゴマの木」の誤写であろうと考えられる。しかし、ショッフはマックリンドルに従って、これをパンジャブおよび西部インドに産する、いまでも *sisam* という名で知られている硬質の良材を指しているとして、これを *blackwood* と訳している。これに対して村川堅太郎氏は、6世紀のコスマス *Kosmas Indikopleustes* がインドの *Kalliana* に関する記述の中で、*σησάμυνα ξύλα* (「ゴマの木」という意味) のあることを記しているから、西方世界の商人たちが *sisam* を音の類似から *σησαμή* と呼んでいたのではなかろうかと推定されている¹⁸¹⁾。

以上に述べたように、ペルシア湾の2つの商業地、すなわちオムマナおよびアポログーのインド方面からの輸入品は、明確でないものもあるが、銅を除けばすべて木材である。大型の船がインドから送られると *Periplus* に述べられているのは、このようなかさばる商品が大部分を占めていたからであろう。これらのものが輸入地やその隣接の地方で消費されたものか、それ

ともさらに海路を南アラビア方面へ、あるいは陸路を西方世界やイラン方面に再輸出されたのかどうかということについては、*Periplus* の作者はなにも語ってくれないが、おそらく白檀材や黒檀は一部あるいは大部分が再輸出されたのではないかと思われる。しかし、ペルシア湾沿岸は輸出品にあげられているように、ナツメヤシの産地であり、その幹は木材として使用されたが、アラビアは一般に木材には乏しかったので、そのほかの木材類はこの地方で消費されたものが相当にあったと考えてよからう。

以上、モスカの東方のオーマン沿岸からペルシア湾沿岸、さらにその外側をイランおよびパキスタンのマクラン地方の沿岸にいたるまでの状況を、*Periplus* の記述を中心にして考察してみた。この書のこの方面の記述は、オムマナに関してはやや詳細であるが、そのほかについてはすこぶるあいまいかつ簡単であり、オムマナについてもその位置を *Periplus* の記事から追求することはすこぶる困難である。オムマナやアポログーへはカネーやバリュガザから、前者からは乳香を、後者からは主として木材類を積んだ船が来航し、またペルシア湾の両商業地からは土産の真珠やナツメヤシや衣服、金、奴隸、またおそらくはシリア方面から送られたパール染料などが輸出された。またペルシア湾頭や湾内にさえ、西方世界の商人の進出していた形跡のあることが、すでに指摘したように、プリニウスの記述から推測することができる。しかし、アレクサンドリア方面からの西方世界の商人のこの方面への来航については、*Periplus* にはなにも記されていない。プリニウスの記している、カラックスやペルシア湾方面で活動している西方世界の商人は、おそらく海路ではなく、シリア方面から陸路ペルシア湾頭までおもむいたのであろう。

このようなことから考えると、*Periplus* の作者は、アフリカのアザニア地方と同様に、この方面へ往来したことはなかったものといつてよく、おそらくアラビア人かインド人の商人または船乗からの伝聞にもとづいて、この部分を

179) Watt, *op. cit.*, p. 401; Schoff, p. 151.

180) 村川氏著, 181-82頁; Schoff, pp. 36 & 152.

181) 村川氏著, 182頁; Schoff, pp. 36 & 152-53.

書いたものと推測される。エジプトのアレクサンドリアを基地とする西方世界の商人は、当時はカネーやラス・ファルタクあたりまでは来航したが、それより東へはあまりゆくことはなかったものと考えられ、オーマン北東部の沿岸やペルシア湾沿岸、さらにインダス河口以西のパキスタンやイラン沿岸は、当時はかれらの活動舞台ではなかったといつてさしつかえなからう。*Periplus* の記事はこのことを明白に物語ってくれるものといつてよい。換言すれば、これらの沿海はアラビア人とインド人、およびおそらくはペルシア人の活動地帯であったといつてよい。しかし、シリア方面から陸路をペルシア湾頭までおもむき、さらに湾内へと進出した西方商人の形跡が見られることは、前述のとおりである。当時はこの地方を領有するパルティアとローマの関係はいちおう好転し、シリアとこの方面との陸路による通商関係はしだいに復興しつつあったようで、ダマスコスとエウフラテス川を結ぶ交通路上の要衝を占めるパルミュラや、エウフラテス川に沿う隊商路上に位置しているドゥラ Dura が、繁栄を開始しつつあった¹⁸²⁾。したがって、エジプトからこの方面への西方世界の商船の来航は見られなかったが、シリア、メソポタミア、ペルシア湾を連ねる商品の流れは、たとえそれほどいちじるしいものではなかったとしても、やはりこれを無視することはできないであろう。

いままで述べてきたところから、アラビア半島の紅海およびアラビア海沿岸の西部は、*Periplus* の書かれたころ、すなわちおおまかにいって紀元1世紀の後半は、相当に活発な海上貿易が行なわれていたことが明らかである。この地方は古代の文明世界が需要する没薬、乳香、亀甲などの産地であり、エジプトを基地とする西方世界の商人が、これらの産物を求めて紅海

岸のエジプトの港であるミュオス・ホルモスやベルニーケーから海上を進出してきたのである。かれらはこの地方で需要のあるさまざまなアラビア向けの衣服、その他のものを船に積んでこの海域に来航し、上記の産物と交換した。しかし、この貿易はアラビア側のかんりの出超の傾向を示していたもののようで、ヒムヤル王国の取引地ムーザへは、ローマの貨幣が大量にもたらされていることが知られる。乳香産地であるハドゥラマウト王国の取引地カネーについては、貨幣の輸入は記されていないが、おそらく同じような傾向が見られたものと推測される。

この海域では、西方世界の商人ばかりでなく、地元のアラビア商人の活動も見られ、さらにインドの商人の来航もあったものと思われる。もともとこの海域は、これら東方世界の人々の活動舞台だったのである。ところが、こうした情勢の中へ、ヘレニズム時代後期以降、しだいに西方の商船の進出が見られるようになり、ローマ帝国の成立とともに、かれらの進出が一段といちじるしくなったのである。こうしてそれまでは没薬と乳香は主として陸路を隊商輸送されていたものが、このような情勢の進展とともに、これらの特産物の輸送経路も陸上から海上へとその重心が転換されることとなった。しかし、オーマン北東部のアラビア海沿岸とペルシア湾方面、さらにこの湾の外のイランおよびこれに隣接するパキスタン西部沿岸は、アラビア人やインド人の活動舞台としてとどまり、これらの地域へはエジプト方面からの商船の進出は見られなかった。このことは、かれらの求める乳香や没薬などが、これらの沿岸地帯には産しなかったことによるところが大きかったであろう。ペルシア湾方面は、やはり西方世界の需要する優秀な真珠の産地であったが、真珠はインド南部の海域にも多量に産し、エジプトの商人はインド洋を横断してこの方面へも進出していたので、真珠はインド方面から求めることができた。*Periplus* の作者はペルシア湾に真珠を産することは知っていたが、それらはインドの真珠よりも劣等であると信じていた。かれがそのように

182) M. Rostovtzeff, *op. cit.*, Vol. I, p. 95 & Vol. II, pp. 575-76. なおパルミュラおよびドゥラの発達については ditto, *Caravan Cities*, 1932 [reprint 1971], ch. IV, Palmyra and Dura, ch. V, The Ruins of Palmyra, & ch. VI, The Ruins of Dura を参照。

信じた背景には、以上のような事情があったのではなかろうか。もっとも、ペルシア湾方面へはシリア方面からメソポタミアを経て、やはり西方世界の商人が進出しつつあったようである

が、この段階ではかれらの活動はまだエジプトから紅海を経てくる商人たちの活動にはおよばなかったものと考えられる。

(未完)